

海外協力の 現場から

スリ・ランカ編

青年海外協力隊員
の記録

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

昭和59年3月

JICA LIBRARY



1026399[4J

国際協力事業団	
受入 月日 '84.12.18	120
登録No. 10939	36
	JVP

序にかえて

昭和59年3月

青年海外協力隊
事務局 長 野村 忠 策

青年海外協力隊が発足して19年を経た。昭和40年末から41年初にかけて1次隊の隊員48名がフィリピン、マレーシア、カンボディア、ラオスの4カ国へ派遣されて以来、今日までに約4,900名の隊員が33の開発途上国へ派遣された。協力隊創設にかかわりをもった者のひとりとして、今昔の感にたえない。

同時に、このような協力隊の発展を見るにつけ、私は、受入各国で高い評価を培ってきた隊員および、本事業の意義を理解して協力隊を育てることに地道な努力を注いでこられた政府、政界および都道府県の方がた、青少年運動指導者をはじめ広範な関係者各位に対して深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

さて、協力隊事務局では昭和54年度から、隊員が事務局へ提出した業務報告書を国別にとりまとめ、『海外協力の現場から』と題して報告書集の刊行を始めた。幸い、各界から「協力隊員の生々しい活動と生活状況に触れて感動をおぼえる」との好評をいただいたので、本年度もセネガル、スリ・ランカの2カ国編を刊行することとした。

いうまでもなく、協力隊員の活動は、開発途上諸国の国づくり、人づくりに“草の根”で協力しようとする我が国の青年のボランティア活動である。日本とは全く異なる文化、環境の中で、そこに住む人びとと共に暮らし、共に働くことには種々の“壁”があり、時には挫折感にとられる。報告書は、その壁を乗り越えて新しい協力の手法を生み出そうと日夜努力している隊員の哀歎に満ちた貴重な体験の記録である。協力隊事業の財産であると同時に、我が国、我が国民全体の財産でもある。

私は協力隊の仕事は隊員受入国にとってはもちろん、我が国の将来にとっても素晴らしい事業であると確信している。今後の協力隊の飛躍的発展のためには国民各位の御理解、御支援が不可欠である。一層、御理解を深めていただくうえで、この報告書集が活用されれば幸甚である。末筆ながら、報告書集作成に御協力願った関係職種の技術専門委員の方がた、ならびに隊員(OB)諸君に謝意を表する次第である。

スリ・ランカ編

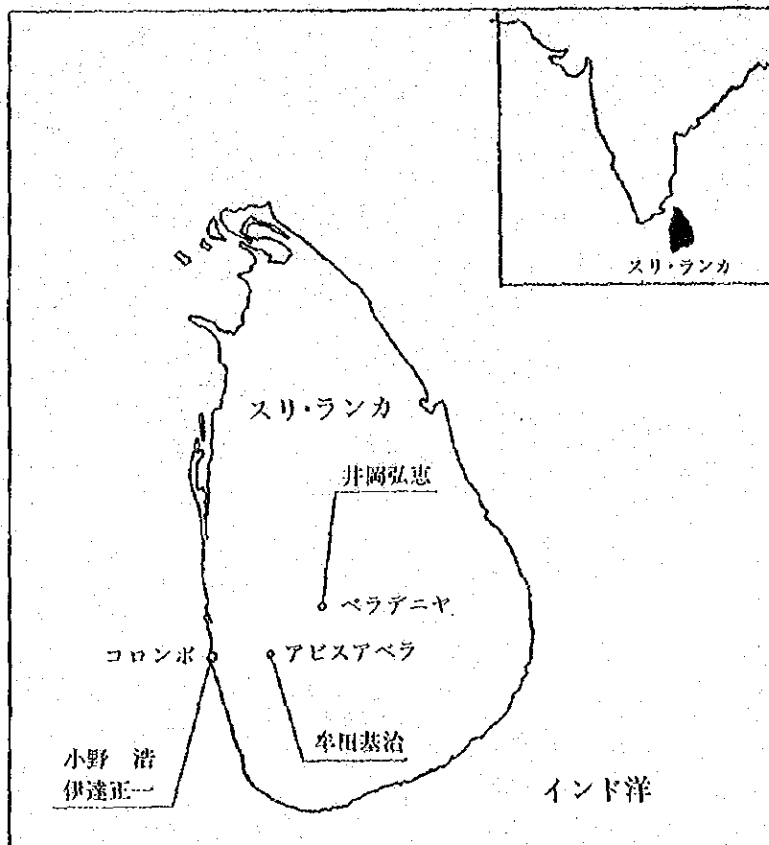
目 次

序にかえて	野村 忠策	(1)
◎スリ・ランカ任国事情		(5)
◎パタンガラ訓練所における野菜栽培指導	牟田 基治	(19)
帰国後雑感	牟田 基治	(43)
牟田隊員の報告書を読んで	斉藤 朝雄	(45)
◎農村開発省での手芸指導	井岡 弘恵	(47)
帰国して思うこと	井岡 弘恵	(65)
井岡隊員の報告書を読んで	古松 弥生	(67)
◎稲作を中心とした農業訓練活動	小野 浩	(69)
帰国して思うこと	小野 浩	(86)
小野隊員の報告書を読んで	御子柴晴夫	(88)
◎ハブロック地区電話局での活動報告	伊達 正一	(91)
伊達隊員の報告書を読んで	坂下 隆義	(102)
あとがき		(106)
〔付〕スリ・ランカと協力隊		(2)
スリ・ランカの略図と概要		(3)

スリ・ランカと協力隊 (昭和59年2月1日現在)

最初の隊員派遣：昭和56年4月								
職種部門	農林水産	加工	保守操作	土木建築	保健衛生	教育文化	スポーツ	合計
派遣中	8 (2)	4 (2)	8 (0)	1 (0)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	23 (5)
累計 (累計)	10 (2)	5 (3)	8 (0)	2 (0)	0 (0)	5 (3)	0 (0)	30 (8)

(注) カッコ内は女性隊員。



スリ・ランカ概要

面積：65,610km²
 人口：1,485万人（1981年3月）
 宗教：仏教徒約70%、ヒンズー教徒約16%
 キリスト教徒約7%、イスラム教徒約7%
 公用語：シンハラ語
 1人当たりの国民所得：300ドル（1981年）
 通貨：ルピー（1ルピーは約10円）
 首都：コロombo
 政体：民主社会主義共和国
 元首：大統領ジュニアス・リチャード・ジャヤクルデネ



スリ・ランカ 任国事情



自然環境

スリ・ランカは赤道の北600~900kmに位置する島国で、その面積約65,600 km²。九州と四国を合わせたより少し広い。それ位の広さであるが、気候的には、Wet zone と Dry zone の2つに分けられる。

これは、モンスーンによる降雨量から分けられている。降雨は、南西モンスーンと、北東モンスーンによってもたらされ、モンスーンの始まる時期は、年によって変動があるが、大体、南西モンスーンが5月~9月、北東モンスーンが11月~3月にわたって吹く。それぞれのモンスーン末期、7月~9月、1月~3月には乾燥するが、逆にこのモンスーンの変わる4月と10月は、雷を伴った激しい降雨となる。

ところが、北東モンスーンは全島に雨をもたらずが、南西モンスーンは、中央から南部にかけて走っている山脈によって遮られ、南西部分才にしか雨を降らせない(ちょうど日本で、日本海側に雪が多く降ることを連想してもらいたい)。よって、この才が湿潤地帯(Wet zone)、残りの才が、4月と10月~12月にしか降雨のない乾燥地帯(Dry zone)となっている。

気温の変化は小さく、年間26~30℃位(コロンボ周辺)。乾燥地帯でも、35℃を越すことは稀だという。どちらの地方でも、4月~7月が気温が高く、私が着任したのが4月だったので、ムッとくるような熱気に、大変な所だと



中央高地に広がるお茶畑

感じた。しかし、2週間もすると、この熱気には順応したと思う。

生活環境

◆衣

衣服、生活必需品も含めて、全体的に品物の量が少なく、品質ももうちょっとというところであるが、大体なんでも手に入る。

衣服については、既成服でなくても、体に合わせて作ることも可能であり、ちょっとした街には、そのようなテーラーショップがあり、価格にしてもそんなに高くはない。最近、ナイロン、テトロン、ポリエステル等の化繊を多く見かけ、カッターシャツで、生地、仕立て全部で100～150ルピー（約1,000円～1,500円）くらいである。

◆食

食料事情とはいえ、これもほとんど手に入り、輸入品も増え、醤油、調味料、インスタント食品等も、コロomboの大きなマーケットで購入できる。市場では、魚、肉類、卵、牛乳、野菜、果物等、比較的安い。ただし、衛生状態は万全とはいえず、用心してかかった方が無難であろう。

外食であれば、一流ホテルのレストランから、5ルピー位で済む食堂まであり、西洋、東洋、中華、日本、カレー料理、なんでも食べることができる。一般的に、一流ホテルのレストランで食べるカレー料理は辛さを抑えてあり、どこでも同じようなもので、安い食堂、一般家庭でのカレーの方がそれぞれに味がある。ナイフ、フォーク、スプーンを使わずに、右手で直接食べてみるのもおもしろい。とにかくこちらの食事は両極端になっていて、カレーはとて辛いのだが、その反対に茶などは砂糖をたっぷり入れて飲む。菓子も甘ったるい物が多い。

嗜好品は、ジュース、コーラから、ビール、ウイスキー、タバコなど、日本酒以外は全てそろう。しかし、ウイスキーは価格も高い。また地方の農村には、密造酒のたぐいのココナッツワイン、カシブ（焼酎に似ている、黒糖から作ったもの）がある。

◆住

住宅は、配属先より集合住宅の1部屋を与えられているので、事情はあまり知らないが、コロomboを中心とした都市部は、最近値上がりかひどいということである。農村地方の人々の家々では、電気、水道もなく、土、砂、石

ころを混ぜて作った壁に、ヤシの葉を載せただけの住宅が多く、下宿先を探すだけでも大変であろう。



キャンディの市場

健康管理について

全国の主要都市、町には国立病院、小さな村には診療所があり、それも無料制度であるが、多数の患者、施設の不備、薬品の不足などの問題を抱え、満足な治療は望めないのが実情である。そこで私達は、個人の開業医に頼っている。医者技術は高いということであり、費用も日本のそれと比べて高くはない。

当地で重大な病気は、コレラ、赤痢、ウィルス性肝炎、デング熱、狂犬病、毒蛇などがある。

コレラ、赤痢については、国内の地域で発生した場合、新聞報道で知ることが出来るので、その地区への出入りを差し控え、もし出入りした際には、生水、生物に注意している。肝炎も経口伝染が一番多いといわれているので、やはり煮沸した水しか飲まないように、また、生野菜にも気を付ける。これとは別に、3～4月に1度の割合で、ガンマーグロブリンの接種も行なってもらっている。

マラリアについては、Dry zone にあって、私達の住んでいる Wet zone ではあまり聞かない。よって、特別に抗マラリア剤 (M. P. 錠) を服用する

などのことはやっていない。

Dengue熱はよく聞くもので、私も赴任後4カ月でやられた。1週間くらい熱が続き、頭痛もひどく、非常に苦しんだ。

狂犬病は、感染のもととなる犬が非常に多い。それも野良犬である。スリ・ランカは熱心な仏教の国であるためか(?)、殺生を嫌い、日本のように首に鎖をつけて飼うということもしないので、犬はあっちこっち自由に行動している。それで対策としては、犬に咬まれないように注意する以外にはないと思う。

毒蛇については、コブラ、マムシのように強い毒を持つものから、咬まれても命に別状なく、その部分が腫れるだけといった程度のものまで、いろいろ生息しているといわれている。しかし、いずれも毒蛇のいるような場所、毒蛇の行動する時間帯は限られているので、事前に注意、回避することは可能である。

つまり、日陰で、草の生い茂った湿った所で多く見かけ、時間帯も、夜間行動するようである。だから、こういう疑わしい場所で作業の必要がある場合は、長靴をはくなり、身軽な運動し易い服装で作業するなどの準備、注意が必要だ。もし最悪の場合として、不幸にも咬まれた際は、素人考えにも血清注射を打つなどの措置が当然と思うが、私の置かれている状態では血清注射を受けることが不可能なので、ここで医学的(?), 科学的(?)にも疑問であるが、事実それで助かったという例も聞いているので挙げておきたい。

先ず、毒蛇の種類がなんであるかを確認すると同時に、直ちにその個所の心臓に近い部分をきつくしばり、どんな小さな村にもいるという、Village Doctor と呼ばれる人の所へ連れて行って措置をしてもらう。処置は、先の鋭いナイフのようなもので切り裂き、血を放血させ、その後その部分を薬草で燻して、これも薬草であろうが、2~3種類のを水と混ぜて経口投与する。それで終わりである。薬草の種類は全く不明であるが、とにかく今の段階では、咬まれないようにするのが最良の方法である。

首都コロンボ

コロンボ市内まで、空港から車で約1時間。車窓から入ってくる、生まれて初めて見る熱帯の国の雰囲気、しばし声も出ない。道路はアスファルト舗装され、道幅もかなり広い。車もけっこう走っている。道路脇に家並みが

続いている。日本でも見られる普通の民家もあるが、ただ抜切れて四つだけ、どう見ても家とは呼べないような掘っ建て小屋も、かなり目につく。

家々の間には、十分な緑がある。ココナッツ、バナナ、パパイヤ、日本には全く無いような植物も、道路脇に繁茂している。路上では、上半身裸、腰に布（サロンと言う）を巻きつけて裸足で歩いている、というような格好の人が目立った。犬はもちろん、牛、豚、鶏、中には猪まで人間と一緒に歩いている。少し道路から離れた所では、象が木材を運んでいるのも見かけた。

ところが、こうした風景も、コロomboの市街地へと入って行くと一変して、その都市化された町並みに驚く。もちろん、日本の都市の趣きとは全く違うが。しかし、どちらにしても、この国全体から見れば、コロombo市が特殊なのであって、国の大部分が前述のような状況になっているのは、間違いない。

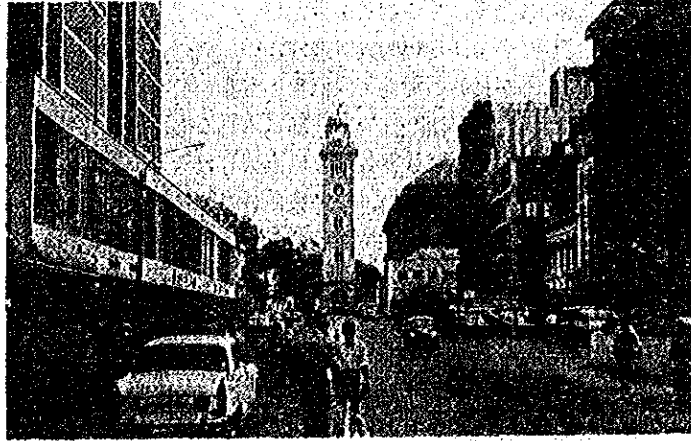
首都コロomboは、人口60万、スリランカ共和国の中核であり、もちろん政治、経済の中心地である。官庁街が市の中心を占め、かなり高い建物もある。また、インド洋に面して高級ホテルもいくつかあり、レストラン、マーケットまで揃っている。この付近を見る限りでは、途上国であることを思わせない。

しかし、これらが急に現われるようになったのも、ここ1年くらいのうちであり、1年前までは、レストラン、マーケットなどもほとんどなかったらしい。それが今では、高層ビルディングの建築現場はよく見かけるし、外資系商社のトレードマーク、アイスクリームパーラー、ハンバーガーショップも目につく。

コロomboに住み始めて1カ月と少しになるが、1カ月前には、テレビゲームの店は全く無かった。それが現在、知っているだけで2軒あるが、夕方ともなると、若者たちが日本製のバイクで乗りつけては、ゲームに無中になっている。

しかし、これらはコロombo市についてのみの話であり、1歩コロombo市外へと足を踏み出すと、電気なしの暮らしはざらにあるのである。

コロombo市はかなりの交通量があるが、交通ルールが徹底していないようで、道路横断中など、非常に危険な目に会うこともある。とは言え、コロomboを中心にして、全国各地に鉄道、CTB (Ceylon Transport Board)、バス、プライベートバスが走っており、料金も非常に安く便利である。ちなみ



首都コロンボ

に、コロンボ—アビスアペラ間約60kmが6ルピー（60円）である。また、それぞれの地域にもバスが走っているので、バスで行けない場所を探すのが困難といっても過言ではないだろう。ただ、運行本数と、時間通りに運行されないのだけが欠点である。

主食・米について

当地スリ・ランカは、日本と同じく主食は米である。米と言っても、日本のそれとは違って、粘り気のないバラバラしたものである。これに、香辛料をきかせた野菜、魚類、肉類の、それぞれ別々に料理したカレーをのせて、混ぜ合わせて食べるのである。西洋式のカレーと違うのは勿論であるが、もっとも違うこの米（御飯）について、書いてみたいと思う。

バラバラしたこの米、元米、日本の米と種類が異なっているのは勿論であるが、こちらにはさらに、ロー・ライス (Raw rice) とパワー・ボイルド・ライス (Power boiled rice) と呼ばれるものがある。ロー・ライスは、日本の米と同じく、生のままの米である。違っているのは、パワー・ボイルド・ライス。

この米は、脱穀した後、籾殻のまま一度ボイルしてから乾燥させて、籾殻のまま貯蔵する。一見しただけでは、ただ一度ボイルしただけのようだが、ロー・ライスと比較して、色々と利点があるようだ。

- (1) 一度ボイルしているので、貯蔵の段階で害虫がつきにくい

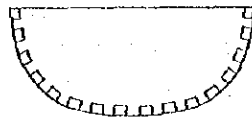
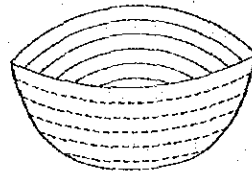
- (2) 同じく貯蔵の段階で、米の変質が少ない
- (3) ボイルしているの、米の栄養が逃げない
- (4) 食べた後腹持ちが良い。加えて、消化にも良い

以上のようになっているが、化学的には、私にもどうしてかは不明。反面、私自身、どうしてもこの米を好きになれない、大きな大きな欠点がある。

それは、貯蔵する以前にボイルし、その後乾燥させるのであるが、その際、天日乾燥のため、十分に乾燥する前に若干発酵するので、くさい（乳牛、肥育牛に与えるサイレージの牧草のような臭い）臭いになってしまう。これは、この米を炊く時に十分に洗っても洗っても、なかなかこのくさい味がとれない。それでこの米を、私はシンハラ語でガンダイバ（くさい米）と呼んでいる。

また、これも米に関連していることであるが、こちらに“ナビリア”と呼ばれる、石取り器がある。

こちらの種は脱粒性が高いので、脱穀作業の際、コンバインは勿論脱穀機も使用しない。それではどうして脱穀するかというと、道路、広場に刈り取った稲株を並べて、その上を水牛、牛、トラクターで、穂の部分を踏んで脱穀作業をする。そのため、石、砂が籾の中に入り易い（スリ・ランカは宝石の産地でもあるが、食事中、御飯の中から宝石ならぬ石が出てくる）。この石を取るのが、“ナビリア”なる器である。



仕組みは極簡単、金属性のボール状のものの内側に、円周に沿って凸凹の溝があるだけ（図参照）。

米を洗う際に、米が完全に浸るまで水を入れる。次に、指でかき回すと、石、砂は自らの重みで下に沈む。これを炊飯用の鍋に水と共に米を流し込む。ナビリアの水がなくなったら水を新しく加えるか、鍋から水だけナビリアに移す。そして、さっきと同く指でかき回す。この作業を繰り返す。最後になると、石、砂だけがナビリアの下方の溝に残る。よって、米だけきれいに取れるのである。

ウェサック祭り

5月26日は満月、ウェサック (Wesak) の祭りだ。大雑把にかつ強引に説明すると、仏陀の生誕・成道・初転法輪・入滅はそれぞれ同じ日で、この月の満月の日となる。インド暦だと、第2番目の月の満月の日となるらしい。全部まとめて今日 (と明日) 祝うらしい。

ウェサックの祭りには、各家庭で様々なチョウチンを作り、中にロウソクを入れ、夜、燃し続ける。また素焼きの直径7cm程の底の浅い皿に、ココナツ油を注ぎ、紐で作った芯を取り付け、玄関前または窓辺に置き、これらも火を燃し続ける。

コロomboではより大がかりだ。仏陀の座像・涅槃像を型取った板や、仏陀一生の絵を額に描いた板を、ケバケバしいネオンで飾りたて、夜中じゅう人を引きつける。

どちらがどうのこうのと言っても仕方無いんだが、やはり気にかかる。文明の一つの象徴である電気。夜のコロomboと普通の家庭でのウェサックを比べれば、コロomboの方がより大規模で華やかだ。しかし、その華やかさも昼間見ると一変する。不安定にやぐらを組んで取り付けられた、ウスベラの仏陀の座像や涅槃像でしかない。

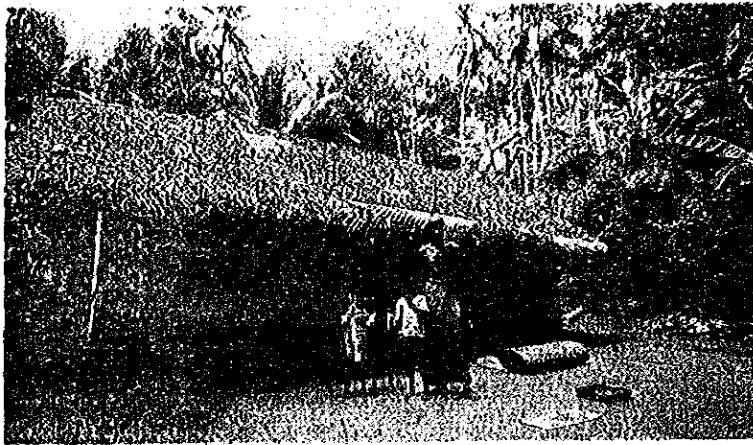
一方、各家庭で趣向をこらしてこさえたチョウチン、これらのチョウチンも、雨が降りだせば回りの紙は剥げ、竹の骨組みだけになってしまう。チョウチンの火、素焼きの皿の火も不安定で、風が吹いたり雨が降ったりしたらたちまち消えてしまう。両者とも同じように不安定だけど、やはりチョット違う。

いつも通り7時半に、元訓練生の家に夕食を取りに行く時、それを見た。3mおきにクイを打って、牛が草地に入らないように柵を作っているんだが、そのそれぞれのクイの頭に、例の素焼きの皿を置き火がついている。道沿いに打ったクイの上で、頼りない火が揺れている。まるで、私を飯に導いてくれるようだ。

誰もが都市に憧れる。この祭りにも、暇のある者はコロomboへ出かける。出かけて行った者の家庭にももちろん、チョウチンの火や素焼きの皿の火が揺らいている。皆、両方ともどんなものか知っている。この国の大方の人々はこのチョウチンと素焼きの皿のことを知っているだろう。

しかし、どんどん全体が便利になり、便利になり過ぎて、家庭のチャウチンの火や素焼きの皿の火を忘れ、忘れさせられ、夜のワッーというような祭りの火しか知らなくなった時、どうなるんだろう。信仰のたまものだったウェサックが、ただのイベントに化してしまう時、どうなるんだろう。こういう例は、世界を見廻すといろいろな所で発見出来る。

満月の下で、チロチロ弱々しく燃っていた、飯に導いてくれた火は、今までスリ・ランカに住んでいたうちの、1つの良い印象に残るだろう。



農村の家

スリ・ランカ人と仏教について

大それたタイトルをつけてしまった。でも、スリ・ランカに少しでも居たことがあるなら、誰でも1度は考えて見るものの一つであろう。

スリ・ランカ人の人口の約70%は、シンハラ人と言われる人達で、彼らのほとんどが仏教徒のようだ。もちろんクリスチャンもいれば、イスラム教の人もいると思うが。

この国の仏教は日本と違って、仏教の教え、戒律を重んずる小乗仏教である。町を歩いてみると、たくさんの仏教寺院を見ることが出来る。また、黄色い布をまとって、傘を片手に歩いているお坊さん達をよく見かける。何故雨も降らないのに傘をいつも持って歩いているのか解らないが、もしかしたら、これもイギリスの影響なのかもしれない。

仏教徒であるシンハリ人を見て、「ははあ、これは正しく仏教徒の教えから来ているな。」と、明らかに思えることが一つある。それは、生き物を殺したり、虐待したりすることに対して極端に嫌がることだ。例えば、今自分の腕に1匹の蚊がとまっていたとする。日本人の場合なら、バチンとやることに何のためらいもないだろう。ところが、敬虔な仏教徒は、あたかも蚊に自分の腕から退いてもらうように追い払うというのだ。あくまでも、敬虔な仏教徒の話である。

スリ・ランカには、シリバーダという仏教徒の聖地がある。これは、高さ2,000 m 強の、スリ・ランカで2番目に高い山であり、頂上には仏陀が降り立ったという足跡がある。毎年、2、3月になると、各地からこの聖地を目指して、たくさんの仏教徒が訪れて来る。私自身も3月に登って来た。さすがスリ・ランカで2番目に高い山とあって、麓から登るのに約3時間要した。さらに頂上近くは、かなり急な階段になっていた。

その登山の途中で出逢った人達に驚かさされた。ごく普通の人達に混じって、70歳近くのお年寄り、身体障害者の人達、中でも驚いたのは両足がなく、2本の腕とおしりだけで階段を1段1段登っていた人だ。仏教徒の聖地ということで、彼らの中のどんな感覚が彼らをそこに押しやるのか。

帰りのバスの中で、同行していった者に聞かずにはいられなかったから、「なんであんなきつい思いをして、あんな所まで登らなければならないんだ。」と聞いてみると、「毎年、毎年登るようになっていて、登らなければいけないんだ。」と、答えが帰って来た。もし、もっと別の人に尋ねてみたら、別の答えが返って来たのかもしれないが、私はその時、納得したような気になった。たぶん彼は、心の底からそう思い、そう答えたのに違いない。

約7カ月間スリ・ランカに暮らしてきて、折りに触れて、スリ・ランカの仏教徒が、仏教に対してどんな位置付けをしているのかと考えてきたが、何故かよく見えてこなかったのは、そこに原因があったのだろう。つまり、日本の感覚で、「仏教と人々の生活」とか、「人々は仏教をどう考えているのか」等々と考えていたから、霧に霞んだみたいに中が見えなかったのだろう。裏を返せば、日本において一応仏教徒と言われる我々と仏教が、如何に薄っぺらな関係であるかを示しているのだと思う。

彼らにとって仏教は、真に生活に密着しているのだと思う。それはまるで空気みたいに。だから、仏教を生活の基盤にして生活している仏教徒に対し

て、「あなたにとって仏教とは何ですか。」と聞いたところで、ちぐはぐな答えしか返って来ないのは、空気を吸って生きている人々に、「空気とは何ですか。」と尋ねることと等しいのだ。



スリ・ランカの僧侶

ところが、これで問題が解けたのではない。ここで自分を取り巻いている環境に目をやってみると、おかしいことがいっぱい目に付く。

まず、よく利用するバスである。乗っている人に、「どこに行くんだ。」と問いかけたくなる程、時間帯に関係なく満員バスが多い。少しでも席が空こうものなら、老若男女関係なく空いた席に向かって突進する。バスの中でのトラブルも、日常茶飯事だ。また、バス停で待っていても、大して乗客がいない時でさえ乗車拒否に会わされる。道路に車は充満し、歩行者等はまるで無視。

会社の中に入っても、人の出世に対しておたみを持ち、自分の部下に八つ当たりする者もいる。嘘をついて、良心の呵責にさいなまされる人など見たこともない。

もう十分であろう。以上は、スリ・ランカでの生活の中でよく見かける事柄である。

次に、仏陀の教えも戒目を上げてみる。

1. 生物を殺傷するな
2. 物を盗むな
3. あらゆるものに対して嫉妬心を持つな
4. 嘘をつくな
5. 酒を飲むな

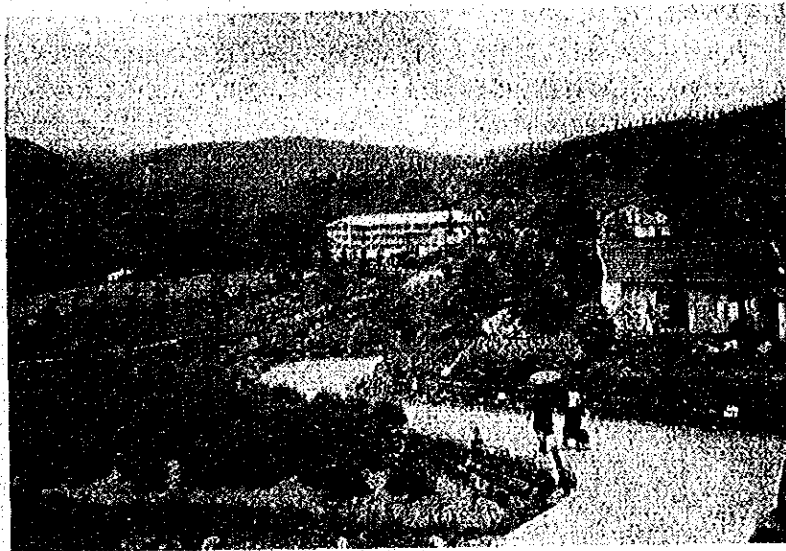
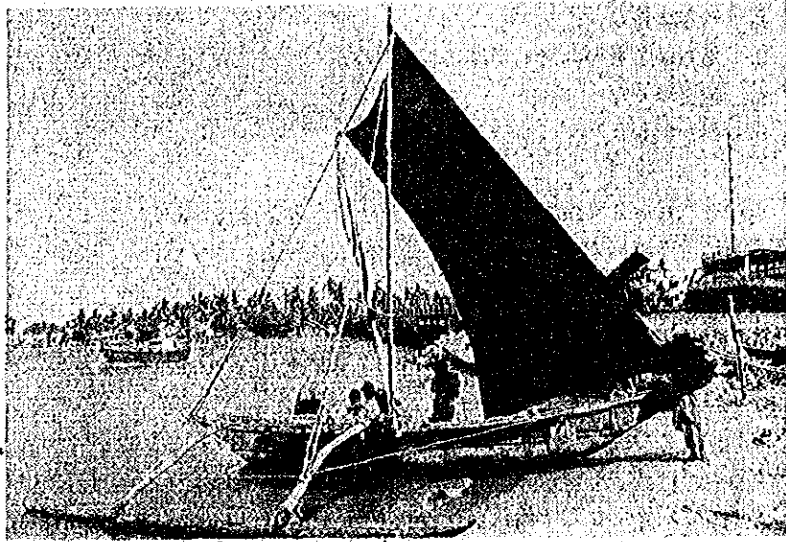
この5戒目を全て達成した者は、1段上の人生を送れるようになる。そしてさらにその時点で8つの戒目が出され、これも通過すると、さらに10の戒目が待っているというのである。

もし宗教というものが、人々の生活の中で価値判断の基準になるものだとしたら、敬虔な仏教徒であるはずのスリ・ランカの仏教徒と彼らの行動のギャップは、どう説明したらよいのであろうか。

ある時、この疑問をかなり教育を受けたスリ・ランカ人に尋ねたところ、彼が言うに、要するに教育の問題だという。スリ・ランカの学校では、もちろんサブジェクトとして仏教を教えている。彼の話によると、ちゃんと教育を受けていない者が前述のような行動を取るのだと言うが、信じられるものではない。それでは、スリ・ランカの仏教はまがいものではないのかと言うと、一番最初に書いた事が納得いかなくなるのである。

これだけ仏教に対して歴史のある国である。仏教が彼らの生活の基盤であるとみたい。彼らの行動と仏陀の教えのギャップが何によっているものか、残りの任期中に見極めたい。

(牟田・小野・伊達隊員の報告書より抜粋)



パタンガラ訓練所における野菜栽培指導

第2～7号報告書

職 種 野菜

氏 名 牟田 基治

配 属 先 国家青年活動評議会
パタンガラ訓練所

牟田隊員の略歴

生年月日 昭和31年10月1日

出身地 佐賀県

学 歴 福岡農業高校専攻科卒

派遣期間 56年4月～58年4月

1. 職場事情

私の配属された国家青年奉仕評議会 (National Youth Services Council) は、青年雇用省 (Ministry of Youth Affairs and Employment) のもとで、主に青少年の国家開発活動への参加を啓発するために設けられたものである。

設営の目的には、開発に関係するそれぞれの分野への青年の参加を推進すること、文化面での意識昂揚、農村社会でのリーダー育成、スポーツ等を通じての交流を掲げている。

NYS Cは、現在7カ所の訓練所(トレーニングセンター)を有しており、そのうちのひとつであるバタンガラ訓練所が、私の配属先となった。

◎訓練所の所在地

バタンガラ訓練所は、首都コロomboより車で2時間程の距離の農村部にあり、あまり便利な場所とは思わないが、設備、環境は、他のNYS Cの訓練所と比較すると、一番整備されているということである。

◎訓練内容

この訓練所では、スペシャル・プログラムと呼ばれるミュージック (パイオリン、ギター等の弦楽器と現地楽器をミックスしたような音楽)、ダンス (現地民族舞踊) と、木工、農業コースにわかれて訓練を行っている。

スペシャル・プログラムのダンス、ミュージックの各コースは、所内の宿泊施設で合宿方式でやるので、出身者も全国各地から集まっている。月に2~3回の割で各地で公演を行い、近い将来には外国との交流として、海外公演も計画されている。

木工は所内ワークショップを使用し、椅子、テーブル、簡単なレンガ積み等を行っている。訓練生は、それぞれ近くの村の若者で、通って来ている。

農業は付属の農場を使用し、稲作、野菜、家畜、茶、等全般において行なわれている。午前中は実習、午後は講義という形式で (このことについては後で書くことになる)、訓練生は近くの村の農家の青年たちで、通ってきている。

◎訓練生の人員、訓練期間

スペシャル・プログラム (ダンス、ミュージック) = 約 100 名 3 年間
木工 = 15 名 (男子のみ) 3 ヵ月
農業 = 15 名 (男子 7 名、女子 8 名) 3 ヵ月

◎スタッフ

15名（農業関係3名） 農場労働者 10名

◎設備概要

事務所、教室（3教室）、宿舎（120名収容）、ゲスト・ハウス（2棟、うち1部屋は私の居室として与えられている）、グラウンド、事務所（農場専用）、倉庫、牛舎、鶏舎、豚舎、耕耘機1台、ゴム（5エーカー）、ココナッツ（3エーカー）、茶（2エーカー）、バナナ（生食用、2エーカー）、パイナップル（1.5エーカー）、水田（4エーカー）、畑（野菜用、1エーカー）、乳牛（7頭）、鶏（1,000羽）

◎外国人

国連ボランティア3名（米国人＝木工、インドネシア人＝養豚、パングラデシュ人＝村落開発）

現在、他のNYSCの訓練所の特色は、次のようになっている。

⑧Heiyantuduwa Training Centre

スポーツトレーニング（バレーボール、フットボール、クリケット）。農業訓練生は20名で、スポーツと農業を行っているそうである（3カ年コース）。

⑨Akaneemana Training Centre

木工、金属加工（メタルワーク）。訓練生は20名で3カ月コース。

⑩Eraminiyaya Training Centre

農業、家庭（料理、パティック）。訓練生は30名。3カ月コース。

⑪Mahiyangama Training Centre

自動車（運転、整備）、農業。訓練生は60名で6カ月コース。

⑫Nilaveli Training Centre

農業、訓練生は40名で3カ月コース（当初の予定では、この訓練所に配属の予定であった）。

⑬Bellwood Training Centre

農業、リーダーシップ研修。訓練生は40名で1カ月のコース。

以上のようになっている。なお、NYSCの訓練所には現在、国連ボランティアのDDSプログラム（Domestic Development Service）のボランティ

ア8名（バングラデシュ=4名、インドネシア=1名、フィリピン=3名）がいる。

また、訓練生には、それぞれ1日=12.50RS（1Rは約10円）の手当が支給されている。蛇足かもしれないが、私のカウンターパートの給料が月に800RS前後である。それで訓練生、スタッフから「あなたの給料はいくらか？」と聞かれると困ってしまう。

2. 協力活動の開始

4月21日、現地訓練を終了して、バタンガラ訓練所へと到着した。スタッフの紹介、訓練所の説明を聞いたあとに、仕事場となる付属農場へと足を運んでみた。農場は山の斜面を利用しており、頂上よりゴム、茶、ココナッツ、バナナ、水田の順の配置である。もっとも、ココナッツとバナナは混植であり、私の業種である野菜は申し訳なさそうに、これらの根元にわずかに植えられている程度であった。植えられているのは、連中が日常、食する唐辛子がほとんどであり、別の場所にもやはり唐辛子とトマト（苗）、ライマピーンが作られていた。

しかし、どれも良好な状態とは言えず、ただ、雑草と一緒に生えているといった感じだった。それで案内してくれていたスタッフに、どうして手入れをしないのか？と、聞くと、「今はシンハラ正月が終ったばかりで、その間はワーカーが出勤せずに管理が出来なかった」という返事だった。

少ない面積の畑だから、その気になれば除草、施肥、薬剤散布の管理は、できるはずだと思ったが、着任したばかりでもあったので、それ以上は質問はしなかったが、この管理が着任直後の仕事となったのである。

それから1週間後、NYSCの本部（Head office）から私の業務について、2名の職員が訪ねてきた。

その結果、一応6月1日をメドに農業の訓練生を募集するので、それまではデモンストレーションという形での野菜栽培と、今やっている農場の管理をやって欲しいということになった。それで早速、農場の一部を使って数種類の野菜を栽培しようと計画した。翌日から計画にそって始めようとしたが現実の問題として、シンハラ語が話せないのである。ワーカー達は、シンハラ語だけで英語は全く話せないのである。現地訓練を受けてはいたが、簡単な挨拶程度で、業務で関係のあるようなのは、ごくわずかであった。

だから口では仕事が出来ないので、連中と一緒に仕事する以外に手はなかった。灌水をしたい時は、井戸端まで行って、除草をする時は実際に草をむしって、休憩の時は、色々と単語を教えて貰ったりと、自分自身がまるで新米のワーカーのように思われた。

何のためにスリ・ランカに来て草取りをしているのだ、こんな仕事なら、現地の人間で出来る、いや連中なら私なんかよりも、もっと上手に能率も上がるだろう。私のような者が、本当の「税金のムダ遣い」と言われるのではないだろうか、などと考えた。それでも、連中は私の為になんとか良く仕事をしてくれて、いくらか楽しくなった。

しかし、それからまた新しい問題が出てきた。

この訓練所には、UNV（国連ボランティア）からの3名のボランティアがおり、そのうちの1人であるインドネシア人の話であるが、彼は「我々はボランティアなのだからにもワーカーと同じように朝から晩まで一緒に働く必要はない。我々はワーカーをコントロールして仕事をさせればそれでいい。もし君のようにやっているとワーカーやスタッフからバカにされる。忘れて欲しい。このことは、君だけの問題ではない。君もボランティア、自分もボランティアなのだ」と言うのである。私がワーカーと同じように働くということでの意見なら、なにも気にしないのだが、最後の「君もボランティア、自分もボランティア」というのがあったので、考えさせられた。

やはり彼の言う通りに「俺はボランティアだから、ワーカーをうまくコントロールして仕事をさせればそれでいいのだ」反対に「ボランティアだからこそスタッフ（スタッフは絶対にワーカーと同じ仕事をしない、口で言って傍で見ていただけ）と違って、ワーカーと一緒に仕事をするべきだ」、両方の考え方が頭の中で繰返し浮んで随分と悩んだものであった。

結果的には、どちらということではなく、ただスタッフやワーカーからはバカにされないような仕事をしなければならぬし、また協力者として、職場の同僚としても仲良くやっへ行こうと決心した。インドネシアの彼には「我々は同じボランティアであっても、方法としてインドネシア式、日本式の方法があってもいい、俺は俺の方法でやってみよう」と言うと、笑って「まあ、あまり無理をしないで、自分の好きなようにやればいいさ。しかし我々は決してワーカーではない、ボランティアなのだ」と言ってくれた。あとになって分かったことであるが、この時、彼は慣れない気候、土地での私

の身体を心配して忠告してくれていたものであった。

5月もすぎ6月に入っても、訓練生の来るような気配や情報もない。それでやはりデモンストレーションと農場の管理を続けた。

オクラ、ナス、インゲン、トマトなどを栽培したが、あまり良い成績ではなかったようだ。

7月に入り、ようやく農業の訓練生が入った。男子7名、女子8名の計15名で年齢は17歳～25歳で、全員、訓練所付近の農家の子弟である。ほとんどが義務教育を修了しており、他の途上国で言われるような文盲は1人もいない（ただし英語は話せない）。また、農家の子弟だけあって、農業に対する知識は、小さい頃から親と一緒に農作業を手伝っているためか、比較的高いように思う。



勤務先農場内の畑

3. 業務活動の内容

7月上旬より訓練生を受け持ち、今月上旬に一応3カ月コースとしての訓練を終了した。その間の業務内容を報告します。

私の受け持った訓練生は、開始当時15名（男子7名、女子8名）であったが、約3週間後、病気により長期入院、家事の都合により2名の訓練生減となった。当初は、この理由が分からず2名減となったのは、私自身の責任ではないか、つまり訓練計画に不満（訓練生が興味をもたない、あるいは方法

が悪い、役に立たないと思った)があり、欠席しているのでは、とスタート早々つまづいてしまったなあ、とハラハラしたものだ。

訓練内容については、特別にNYSCの本部(Head office)からの指示もなく、自分の思う通りにやって下さい(?), やっていいということだった。細部にわたり具体的に指示されるのもやりづらいであろうが、反対に全く自由に自分の思い通りにやるというのも大変考えさせられた。ただ単に事前準備の仕事が増えるとか、手間がかかるとかではなく、私には教職や実習助手の経験もないのに、ましてや授業内容計画の作成など、荷の重いことばかりで……もしも失敗でもしたら。

私個人、ボランティアという、全体を構成しているごくわずかの部分にしすぎないのに、こちらの人々にしてみれば1部分=全体で、あいつが駄目ならおそらく他の者もきっと駄目だろう、ということになる。そんな評価をされるようで、ある意味では責任の重さ、重大さを改めて認識させられたし多少の気負いも感じた。そんなことを感じつつも、農場スタッフと話し合い、一応の計画を立てて訓練を開始した。

◎午前中(8:30~11:30)——実習を主体に行い、訓練生、畑をそれぞれ三つに分け、グループで灌水、施肥、除草、防除等の管理をやらせ、グループごとに競争させる様な計画であったが、訓練生の欠席や、UNボランティア(養豚)農場の全体管理とのかねあいもあって、実際にはほとんど女子訓練生と共に実習する結果となった。最初は、畑の整備から始めて、インゲン、ライマピーン、ナス、オクラ、カボチャ、ニガウリ、ピーマン等の、とにかくこちらで良く見かけることのできる比較的栽培の容易なものを、こちらの方式(?)で行った。

例えば、畑の整地、うね作りは、耕耘機、トラクターは使用せずに、ほとんどが鎌を使い、肥料も化成肥料でなく堆肥(牛糞、鶏糞、稲わら)、除草は手を使い、ただ防除には殺虫剤を使用した。

これには、まず第1に農場の子算が少ない(耕耘機が1台あるだけで、それを動かす燃料代が少ない。化成肥料も高いのであまり使えない)。この訓練を終了した後にそれぞれの家庭で野菜を作って貰うには、なるべくお金のかからない方法でやる必要があった(訓練生の家もお世辞にもお金持ちとは言えない)。

したがって、私もこちらの栽培方法をあまり知らなかったので、実習指導と

バタンガラ訓練所における野菜栽培指導

いうよりは一緒に、自分自身の勉強もかねて、仕事をやるという形だった。

◎午後(2:00~3:00)——講義。週3回(月・水・金)各1時間ずつ受け持ち野菜の生理、分類からはじめて、各論として堆肥の作り方、トマト、ニガウリ、ピーマンの栽培方法(基本的な)を教えた。

ここで問題となったのは、やはり言葉であった。8月までは、カウンターパートが英語からシンハラ語に通訳をしてくれていたのだが、9月からは彼が別の訓練所に転動となったために、自分一人でシンハラ語を話さなければならなくなり、計画の半分位しか進めることが出来なかった。訓練期間は、限られていて、さらに3カ月の延長をNYSC本部に頼んだのだが、一応10月上旬には全員、この訓練所から出て行ってしまった。もっと他にやるべき事、教える事があって、訓練生に対して申し訳ないと思っている。

これからの業務の予定は、また新しい訓練生が入るが、それまでは連中と栽培してきた野菜の管理を行いたいと思っている。それと、これはNYSC本部からの話であるが、“訓練終了者の家庭での栽培指導も行って欲しい”ということである。これについては、一応、私に出来る限りのことは、すると話している。



午後からの授業風景

4. 派遣前訓練と現地訓練の効果について

朝は眠いの起こされて走ったロードワーク、難しい話についてアクビの出

た開発・文化講座、苦手の英会話に追い回された語学訓練、絶対禁酒、消燈、点呼等の諸規則。当時は、何んと一方的（開発・文化講座）、残藩（語学訓練）、封建的（点呼、ロードワーク、諸規則）と思ったものだ。が、今、実際に現地で生活してみると、どれもこれも必要なことで、“行ってしまうと何とかならさ。すぐに慣れてしまうさ”と簡単に思っていたのに、やっぱり訓練中は甘かったんだと考え直させられる。

私の勤務先だけが特別なのかも知れないが、ある種の植民地スタイル（colony system）の縮図ではないかと思うことがある。2種類の人間があり、極少数の征服者、つまりスタッフと多数の服従者・ワーカーである。物質的な搾取は行わないが、精神的にはかなりの圧力をかけ服従を誓わせている。

農場の例をとると、スタッフはワーカーに仕事を言いつけるだけで、決してワーカーと一緒に仕事をしようとしな。もし、言うことを聞かなければ“お前は今日限りクビだ”と言っておどかさ。

しかし、上部の人間（NYSC本部）が来ると、さも自分1人で仕事をした様な態度で案内し、説明して、ワーカーの苦勞を話そうとしな。

他にも風俗、習慣、価値観の違いからくる矛盾、とまどい、間違、イライラ、ストレス等、どれも開発・文化講座で承知済みのことであつたのだが、訓練中はまだ真剣さがたりなかつたと思つづく。

語学については、訓練中にかなり詳しく丁寧に、時間外でも教えて貰つたのであるが、私のような基礎からやらねばならぬ者の場合、どうしても十分でなく、もう少し時間をかけてもらえるならという希望もある。

訓練中、諸々の規則については、当時、かなり抵抗を感じたのである。しかし、こちらでも法律は勿論、職場の就業規則、宗教的規則、道徳と、理由がわからなくても遵守しなければならない。それに対して、私はともすれば外国人、ボランティアという特権意識のなかで知らず知らずのうちにルーズになりがちである。それを未然に妨ぎ、納得の行かないことでも“法は法”と遵守し、理解しようとする努力を養う為にも、あの訓練中の規則はいい体験ではなかつたろうかと思つている。

現地訓練は、着任後2週間、シンハラ語を中心にコロombo市内の仏教寺院において受けた。講義は英語で行われた為、英語の苦手な私には、難しい授業となつてしまった。それでも国民の70%が熱心な仏教徒（上座仏教）とい

り国柄、仏教に対する人々の考え方、捉え方等を知る上で参考になった。

また、難しく、短期間ではあったが、配属先でもシンハラ語に対して特別何の抵抗も感じず、自然と片言の話ができたのも、この訓練の効果ではなかったらうか。

5. 訓練と問題点

10月中旬、第2回目の訓練生募集に伴って、訓練所所長、農場スタッフ、UNV、私の4名で面接を行った。当日10名の定員に対して、26名の面接受験者であった。

受験者全員、当訓練所周辺の18~32歳までの男女で、自宅から通学可能な者ばかりである。それぞれ農家出身の子弟達であるが、自ら志願して自営を目的として訓練を受けたいというのが少なかったのには、少々ガッカリさせられた。

訓練を受けたいと思った動機を聞けば、「家にいても何にもすることがないから」「訓練終了後は、農場でワーカーとして働けるかもしれないから」「終了後はどこかに就職を世話して貰えるかも」「訓練生として1日いくらかの訓練手当が貰えるから」というのが返事であった。

また、前回の第1回の訓練の場合もそうだったが、女子の面接者の方が、男子のそれよりも多かった。これは若干、偏見かもしれないが、女子の方が男子よりも目的がはっきりしていて、根性もありそうで積極性も高いようにも思われる。

11月2日、面接で選んだ10名（男子3名、女子7名）と共にスタート。基本的には前回の訓練内容と同じようになった。午前中は実習、午後は講義の三カ月コース。

前回の訓練の場合、言葉からくる戸惑い、間違い、栽培方法の相違の点など、ほとんどが、自分自身の自信のなさからくる問題が多かったのであるが、今回はいくらか慣れてきた為か、自分自身からのものは、少しばかり減って、他の面での問題点を気付くことができたようだ。

まず、開始から現在に至るまでも解決していないことであるが、スタッフ同士の協力性の欠如（人種間と呼ぶべきかもしれない）というものに悩まされている。

訓練開始に先立ち、今回の訓練計画書を1人のスタッフ(タミール人)、U

NV, 私の3名によって, 訓練所所長にまで報告し, 作成していた。ところが, それから1週間ほど経過して, もう1人のスタッフ(シンハラ人)が出張から帰ってきた。そして, 我々に一言の話も, 相談もなく, 彼1人によって勝手に作成し, それを訓練所所長に提出した。

所長は所長で我々の計画書でスタートしていることを知りながら, 再度シンハラ人スタッフの計画書にサインをして私に渡した。その計画書は, 私の実習の割合が大幅に減らされ, その減った分の時間数だけ, 農場の仕事に割り当ててあった。

それで, こんな事ではただでも時間が足りないのに(以前, 普通3カ月でも短かすぎるので6カ月は欲しい旨, NYS Cのヘッド・オフィスにリクエストしていた)と, そうスタッフ訓練所所長に意見した。

ところが速中も「ミスター・ムタ達で作った計画書では, ヘッド・オフィスに報告できない」と一歩も譲らず, 平行線のままであった。そうこうするうちに, UNVの彼は「我々のフリータイムが増えていいじゃないか」と半ばやけくそで, あまり意見しようとしな。タミール人の方も「彼の計画書でやろう」と消極的になり, 当初の計画書を取り下げてしまった(後になって知った事であるが, 「この件はタミール人のスタッフが作成に加わっていたから駄目になった」ということである)。

結局, 私1人がいくら騒いでもという形で, 彼の計画書に従わざるを得なくなった。その結果, 私の持ち時間は月, 金曜日の午前中は実習。月, 水, 金曜日の午後は1時間ずつ講義となっている。

ただ, ひとつだけ救われたのは, UNVの彼が任期終了間際だったので, 外出が多く, あまり訓練に出て来なかったことだ。そこで, その時間帯を私が使わせてもらった。

この計画書の件以外でも, タミール人とシンハラ人スタッフは, 決して一緒に仕事をしないから, 緊急を要する場合にも, 話し合い, 協力性がない為に進展しない。

また, ワーカー, 訓練生も妙にタミール人の彼を毛嫌いして, 表面はうまくやっているようであるが, お互いに親近感, 信頼感もないように思える。この協力性の件については, まだまだ悩まされそうである。

現在, 受け持っている訓練生は, 今月末日で一応終了し, 2月より再度, 訓練生を受け持つこととなる。次回の訓練で特に異なる点は, 当センターの

位置するケゾール地区より募集し、寄宿制度となる。

また、UNVが帰国するので税所隊員（56年1次）が当訓練所に転勤となり、私と2人で担当する。

訓練期間は2カ月（その後すぐに5カ月コース、6カ月コースが続く）の予定だということである。

訓練期間の長短は、一体何を基準にしているのかもわからないのであるが一応、こちらの意見が反映されていないが、仕方がないので与えられた時間、期間で出来る限りのことをやるしかないと思う。

6. さまざまな人間関係

職場では、業務内容の項で書いたごとく、シンハラ人とタミール人にはさままれて苦労させられている。シンハラ人とタミール人との抗争は、2000年以来的の問題だ。両者は人種、言葉、宗教、習慣がそれぞれ異なっているのは勿論であるが、特に言葉はシンハラ人はシンハラ語だけしか話せないものが多い。一方、タミール人は彼らが日常会話で使うタミール語以外に、必要とあればシンハラ語を話し、さらに英語を話せる者の率も、シンハラ人のそれよりも高いのではないだろうか。

一般的にタミール人は、少数民族であるがゆえにか、よく勉強していて、努力家のように思う。ところが、それに反して社会的に恵まれた職業についておらず、茶、茶園の茶摘み、ラバー園のワーカーといったものが多い。仮に政府機関、役所関係に就業していても、出世できず、つまりシンハラ人に比較してタミール人にも平等の機会（チャンス）を、と彼らが願っているのではないだろうか。

もっとも、我々のように単一民族、単一言語という状況の中で育ったものには、まだまだ理解できない面が数多くある。それはともかく、このシンハラ人とタミール人の問題外では、これといった特別な障害はスタッフ間になく楽しくやっている。

一方、訓練生との間には、あまりにも親しくなりすぎたのではという懸念もある。つまり言葉に詰まり、つい甘やかして休憩時間を延長してしまう（特に実習中がそうだが）とか、煙草を与えたり（20歳以上の者でも、訓練所内では禁煙となっているのだが）とか。

速中が行っているスタッフと訓練生の間の上下関係（スタッフは神様か殿

様で、訓練生は奴隷か家来)が必要とは思わないが、ある一定の線は引いて、訓練生と私の立場は明らかにしておかねばと思っている。

住居の対人関係については、訓練所内の独立平屋4部屋にUNV3名(アメリカ人、インドネシア人、バングラデシュ人)と私達(上村隊員56年2次)の計5名で住んでいる。このため、日頃話しをするのはUNVの連中とで、言葉に詰まりながらなかなか大変であるが、時々酒を飲んだり、外食と一緒にいたりして、まあ楽しい暮らしではないかと思う。ただ、上村隊員と1部屋に同居しているので、自然と日本語で話し、自分達の部屋にとじこもる傾向にある。

住居以外での対人関係は、訓練生、農民、マーケットの店員、おやじ、バスの運転手、おまわりさん、乞食のおじいさん、など楽しくて気さくな人々で、業務上必要な言葉(単語)はちっとも進歩しないのに、この連中と話す冗談、馬鹿話は、どんどん覚えるのには自分ながら驚いてしまう。

黒い大きな瞳でみつめ、ニョッと笑い「アウボー」(今日は、正式には「アユボーワン」)と呼びかけながら「スリ・ランカ・スマイル」に囲まれて親しくしてもらっている。

ただし、この「スリ・ランカ・スマイル」もコロomboのような都市では注意しなければならない。つい調子に乗っていると、あとで煙草をくれ、小銭をくれ、あれをくれ、これを買ってくれ、と当然の行為のように平気な顔で要求されるのには、閉口してしまう。でも、この「スリ・ランカ・スマイル」はどことなくジャバニーズ・スマイルに似ていて好きである。

ところで、私の健康状態だが、年末、年始に健康診断を実施してもらったが特に異常はなかった。赴任4カ月目にデング熱でやられた以外は、特に病気はしていない。肝炎の予防注射は3~4カ月毎に実施してもらっている。精神面での娯楽は少ないが、同僚隊員がいるので結構楽しくやっている。

7. 1年間の業務活動をふり返って

昨年4月下旬、現地訓練を終え当バタンガラ訓練所に着任以来、主な業務となった農業訓練生に対する野菜栽培の実習指導及び講義を担当し、3カ月コースを2回、1カ月半コースを1回と、計3回の訓練を行った。

3回の訓練とも18歳~25歳までの男女で1回目15名、2回目10名、3回目18名の計43名であった。

訓練生の学歴は、義務教育9年（初等5年，中等4年）を終えており，なかには高等課程2か年に進めるG. C. Oレベル（Oレベル國家学力検定試験，General Certificate of Education Ordinary Level）の合格者もいたほどで，自分の名前も書けないとか，話すだけで書き取りができないなどの文盲は1人もいなかった（私の場合はシンハラ語に関して少し話すことが出来るだけで，シンハラ文字は書けない文盲なのに）。

ただ，英語の方は，1～2人のものが少しわかるだけで，その他のものはシンハラ語だけしかしらなかった。

いずれの訓練の場合も，午前中は実習として農場でオクラ，トマト，ナス，キュウリ，唐辛子等の果菜類，ササゲ，インゲン，カクマメの豆類とダイコン，キャベツ等を栽培し，播種から移植，収穫までの灌水，施肥，除草，病虫害防除の管理を彼等と行った。栽培の結果は果菜類でトマトだけが種子消毒を怠った為にエキ病，ウイルス病にやられたり，播種直後に集中豪雨に遭ったりしてさんざんの失敗であった。それにダイコン，キャベツもあまり良くはなかった。しかし，トマト以外の果菜類，豆類は比較的まずまずの成績ではなかったかと思う。

もっとも，訓練所の農場としては貧弱な設備，不足しがちな用具，機具，肥料，農薬類，灌漑・排水の不良，適地とは呼び難い畑，加えて管理の不手際をも手伝ってか，結果的に栽培した野菜を販売した後に経費を差し引いて考慮すると，農場としての収益を上げることが出来なかった。

午後は週3回の割合で講義を行った。講義の内容は以前にも報告書に書いた通り，特別の指示，依頼もなかったので，訓練期間に合わせてそれぞれ講義予定表を作成し，訓練所所長の認可を経て行った。概略は次の通り。

1. 野菜の種類と分類（英語名とシンハラ名を重点に。例：キャベツ＝ゴ7，ナス＝パッウ）
2. 野菜栽培と環境について（生育温度，水，光環境，土壌環境など）
3. 施肥について
4. 病害虫と農薬について
5. 各論（ニガウリ，トマト，唐辛子，ナス，キャベツ等）

先にも書いたように，訓練生は英語が理解出来ないので講義の場合は特に，シンハラ語を使うしか方法はなかった。私の場合も，彼等が英語に対して全く理解出来ないのと同様に，シンハラ語の方は話すだけで文字は書けない。

それで、まず黒板に英語で書いて、次にその意味をソンハラ語になおさなければならぬ。

ソンハラ語の発音をローマ字式にアルファベットで書くか、または、1人の訓練生に英→ソンハラ辞典を持たせて単語の意味を調べて貰って、全員にわかる様に説明させる。

それでも辞典に載っていない時や難しい場合は、絵をかいたり、手ぶり身ぶりで必死になってやっている。

農場の訓練担当には、我々(56年1次、税所隊員、養鶏)の他に、3名のスタッフがあり、彼等に英語の通訳を頼めばやってくれるだろうが、講義の内容が正しく伝わるかどうかは疑問がある。それに、彼等は彼等で、我々の講義以外の日には、別に水稲、家畜(牛、豚、山羊)について講義を持っているし、あまり無理を言うのも悪いし、出来るだけ我々の力でやって行こうということになっている。

1年経過した現在、こうした訓練をやっていく上で、最も言葉(英語、ソンハラ語)の習熟度を要求されることを、つくづく再認識している。

意志の伝達、作業の説明、講義など、知っている限りの単語を使い、わかり易くやっているつもりであるが、それでも首をかきげたり、頭をひねったりのわからないという動作、“I can not understand”と言われると情けなくなったり、自信をなくしたり、また、「どうしてわからんのだ」とイライラし大声を出したり怒鳴ったり。誰かが、南の国の人々は「喜怒哀楽」に富んでいると言っていたが、こうして考えてみると、私の方がよほど「喜怒哀楽」に富んでいると思っている。

8. 受入れ機関について考えること

①訓練期間について

私が担当している農業コース訓練は、野菜、養鶏(税所隊員)を主体に置いて、水稲、家畜、茶の実習、講義を通じて農家の後継者、基礎教育から落ちこぼれた若者に対して農業の技術を教えたり、そういう連中を少しでも良い方向に導こう、という目的で行われているが、このように農業全般に渡っているために、非常に多くの時間を必要とする。にもかかわらず、訓練期間が3カ月、1カ月半というのは、あまりにも短かすぎて訓練が実りのあるものになるとは思えない(私をもっと言葉も上手にうまく指導していけば、短

パタナガラ訓練所における野菜栽培指導

かくてもいくらかは向上するかもしれないが)。よって、このような訓練を本当に稔り（仮に農家の後継者を対象にした場合、訓練修了者が自信を持って自営できるようになるまで）あるものにしようとするなら、どうしても最低6カ月以上は必要で、もし仮に1年間になったとしても短いことはあっても、決して十分な期間ではないと思う。

つまり、6カ月、1年やったからといって完全ではなく、やろうとすればまだどこまでもやれると思う。もっとも、もし、そんなに期間が長くなれば、こちらも、言葉、技術、経験もかなり必要となって猛勉強しなければならないのだが……。

この訓練期間の問題はすでに NYSC の Head office（役職は下のほうで）の係の者と話をしたことがある。その際の返事は、「もし、彼等がより多くのこと、高等的なことを学ぼうと考えるなら、政府直轄の Agriculture Farmers School または Agricultural Training Institute があるので、君が教えてくれるのは、基礎的なもので十分ではないか」「もし訓練を1年、2年と長くすれば、それだけ効果は上がるだろう。しかし、それに伴って費用もそれだけ必要になる。それに NYSC は、政府の機関だから、数多くの青少年にチャンスを与えなければならないのだ」ということであった。

納得いくような返事でもあるが、なんともやりきれない気がする。期間が短いと、私も困るのは事実であるが、それよりも訓練を受ける訓練生が一番かわいそうに思うのである。

② NYSC の機構について

NYSC のポストの概略は次の通り。

NATIONAL YOUTH SERVICES COUNCIL

Chairman/Director General.

Director. (2名) Administration. Development.

Deputy Director. (5名) Administration. Development. I.
Development. II. Development. III.
Technical Services.

Asst. Director. (14名) National Services. Agriculture.
Centre Training & Youth Guidance.
Cultural & Youth Festival.

Publicity & Extension.
Research & Development.
Youth in Business.
Sports & Recreation.
Field Training. Foreign Affairs.
Voluntary Service. Youth Clubs.
Establishment. Supplies.

Asst. Director.

(N.Y.S.C. Regional Office.) (8名) Western Region. Southern Region.
Eastern Region. Central Region.
Uva Region. North Central Region.
North Western Region.
Northern Region.

D.Y.S.O.

(District Youth Service Officer.) (24名) N.Y.S.C. District Office. Officer In-
Charge of Districts.
(7名) N.Y.S.C. Training Centre. Officer In-
Charge of Training Centre.
In the branches N.Y.S.C. Head Office.

Y.S.O.

(Youth Service Officer.) All over the branches of N.Y.S.C.
Instructor Or Technical Officer.

9. 今後1年間の予定と展望

現在、第4回目の訓練生18名(男子10名、女子8名)を4月から受け持っている。5カ月の予定である。

訓練期間が短い、短いといつも言っていたので5カ月になったのか、またはヘッド・オフィスのプランでこうなったかは定かでないが、いずれにしても私にとっては、うれしい事には違いない。

今回の訓練も以前と比較して特に変更していないが、実習の面において、日本の種子(キュウリ、ピーマン)が手に入ったので、デモンストレーション的に栽培し、講義では簡単な実験(発芽試験、蒸散、光合成等)を採り入

れてみたいと思っている。

今回の訓練が8月末で終わり、その後9月から6カ月の予定で20名程度の訓練が予定されている。

今年1月、人事異動で訓練所所長以下、数名のスタッフがかわったのであるが、我々に非常に理解があり、協力的、親切であるので、彼等を裏切ることなく、仲良く楽しく、名実ともに充実した2年目を送りたいと思う。

10. 2年目——その後の業務状況

今年4月よりスタートした5カ月間コースとしての訓練を先月末（8月31日）に終了した。よってその期間のことを重点において“その後の業務状況”を報告したい。

4月1日、4名の訓練生を迎え、税所隊員と訓練を開始した。訓練開始に先立って、NYSCのヘッド・オフィスからの連絡では、20名の訓練生を送るということであったが、実際に開始当日（4月1日）には、4名のみで全員集合しなかった。それは、次のような点が原因であった。

1) 今回の訓練より、訓練生の選抜をNYSCのRegion office または、地方出張事務所が行った為に、各々のオフィスで選抜した訓練生に対してのインフォームに食違いがあった。

2) 4月中旬は、ここスリ・ランカの正月にあたった為に、上記のインフォームを正確に受けていても、訓練生自身が正月明けてから訓練に参加するというケースが起こった。

結局、このような理由で、当地の正月が明けた4月下旬から集合していなかった訓練生をも含めて計18名で本格的に訓練に入った。

訓練内容の概要は、前回、前々回等と大差なく午前中は実習として訓練生の半数と共に、実習農場での栽培、管理を行い、残りの半数は税所隊員が養鶏の実習を担当し、午後は税所隊員とそれぞれ90分程度ずつの講義を行うというものだった。

5月に入り、すぐにナス、トマト、唐辛子の為の苗床を準備したのであるが、雨期の為に作業は遅れるし、せっかく準備した苗床も、豪雨により苗床の土は流亡してしまった。このような状態では、とても播種も無理だと考え豪雨への対策をしなければならなくなった。

雨に対する何か良い方法はないものかと、訓練所付近の農家を見て廻った

が、実際に野菜栽培を（本格的に）している農家もおらず、あまり参考にならなかった。

要は上からたたきつける雨さえしのげば、何とかなるだろうと思い、少々高価ではあったが透明のポリエチレンシートを調達し、割竹で作ったトンネルの上にそれを被せた。確かにこれで雨に対しては万全とまではいかなくとも、苗の土、種子の流亡を防ぐことは出来た。



バナナの葉のポットへの土詰め作業

しかしながら、苗が若干、軟弱徒長の傾向になる、ポリエチレンシートのコストが高い（1平方メートルで3RS=30円）ため、訓練生に対してあまり積極的に推めることが出来ない、等の問題点も残っている。

それ以外にも、蟻の喰害、野良犬の侵入にはずいぶんと悩まされた。

7月初旬、悪戦苦闘を続けた育苗もなんとか定植までこぎつけた。定植後は特に追肥、除草、薬剤散布、等の管理も可能な限り訓練生に自主的にやらせて、悪い点、改善点を指示して行く方向にした。

また、当訓練所に、電気配線、自動車整備、木工（男子のみそれぞれ10名ずつ）、家政コース（女子のみ約50名）が新設され、午前中は実習として(?)農場、訓練所の管理作業をするようになったので、今まで人手不足のため手が廻らなかった訓練所内、農場の荒地を整備し畑作が可能となった。そこで栽培する野菜、作物の選定から耕作準備、灌水、施肥、除草、病害虫防除の管理を引き受けている。

バタンガラ訓練所における野菜栽培指導

現在、そちらで栽培しているのは、甘藷、ダイコン、キャッサバ、豆類、オクラ、ニガウリ、唐辛子、セイロンホウレン草、等である。

8月に入り、先に定植したトマト、ナス、唐辛子の管理をやっていたが、トマトに萎縮病、しり腐れ病が一部発生したが、その他のナス、唐辛子は順調に生育した。

一方、講義は、当初計画した通りに消化することが出来た。

行った講義の内容は、次の通りである。

- 1) 野菜の分類
- 2) 栽培と環境について
- 3) 肥料と農薬について
- 4) 各論 (塊根類、ウリ類、果菜類、豆類)

この回の訓練は、着任後1年経過し、訓練回数も通算4回目、ということもあって、わずかではあるが、言葉、環境、習慣にも慣れてきており、1年目の経験をふまえて比較的効果のある試行も可能であった。また、加えて過去の前回、前々回等の訓練期間が3カ月、1.5カ月というのであったのに対して、5カ月間と少し期間が長くなっていたので、いくらかの余裕を持って事に当たることが出来たのではないかと考えている。

また8月下旬、新設されたJICAオフィスにおいて、我々の受入先であるNYSCのDeputy Director, Asst. Director, カウンターパート、訓練所所長、に出席してもらい、公式の会議が開催された。

会議は駐在員の進行のもとに、今回の会議の目的から始まり、我々の持っている質問、問題、意見を述べて受入先からの返答を得て、意義のある会議であった。今後、受入先の返答通りに行動があると、活動も段々とやりやすくなるのではないかと思う。

現在、恐らく活動期間中、最後となるであろう訓練を、23名の訓練生を迎えて、今日よりスタートしたばかりである。訓練内容は基本的にはあまり変更ないと思うが、今回は稲作に挑戦してみたいと思っている。これは、今の時期に収穫するはずの水稲の収穫がないため、農場スタッフと協議の末、やってみようということになったからである。

活動期間もあと3分の1弱を残すだけとなってしまった。とにかく最後まで頑張りたいと思う。

11. 余暇の活用について

業務以外の余暇の時間は比較的に持っている方と思っている。土、日曜日は休日。月に一度は必ず満月日で休み(ただし土、日とかさなる月は別)、その他にも色々の祭日が多く、年間30日位になるであろう。

そこで、余暇はどう過しているかと言えば、特別これをして過しているというのではない。街に買い物(週に2回程度自炊、それ以外は訓練所の食堂)に出て、食料品を買って同居の隊員と、日本食のようなものを作って食べたり、コロンボの連絡事務所を利用して貰って、映画をみたり、中華料理を食べたりで過ごす休日が多い。

ただ、宿舎が訓練所内にあるため、休日、平日、関係なく、訓練生、スタッフがムダ話をしに来てくれるので、時間を持てあますということはない。

また、きわめてわずかであるが、気が向いた時、訓練生に日本語を教えたりもした。余暇の活用と言っても、活用になっておらず、ただ、ひたすら自分だけのみの為になっていることを反省しなければとも思っている。

12. 業務状況と協力活動の効果について

9月より恐らく活動期間中の最終組となるであろう通算5回目の訓練を5カ月の予定で開始し、現在に至っている。

訓練生の人員は18名(男子6名、女子12名)である。今回もやはり当バタンガラ訓練所の寄宿舎を利用する方式である。従って、業務、訓練の内容は前回とほぼ同じく、午前中は実習として農場において作物の播種から収穫までの一連の管理を指導しながら、午後は講義を行うといったパターンである。内容的に少し詳しく述べると、実習においては前回の訓練生と栽培していたトマト、ナス、唐辛子、豆類の管理を継続して行いつつ、それに新しくキャベツとキュウリの苗床作りから始めた。また、初めてのことであるが、水稲も行っている。

先のトマト、豆類はすでに収穫も済み、ナス、唐辛子については、収穫続行中である。

キャベツは播種してから徐々に間引きをして育苗、大きくなった苗を本圃定植する方法と、間引きをしてさらに1回仮植を行ってから本圃に定植する方法の二通りでやっている。どちらが結果的に良好となるかは、現時点で不

明であるが、いずれの場合も定植直後に集中豪雨を受け被害を蒙った。ひとくちに集中豪雨といっても、分かり難いであろうが、それはひどいものである。

100メートル先が見えなくなる程の降りかたで、2～3時間位続くのである。さらに当農場は、立地的にも良好な条件ではなく、ちょうど谷間となっているので、降った雨が滝のように流れ込み、苗は勿論、土壌まで流亡してしまう。そこで、苗床に残っていた分の苗を再度定植し栽培中である。例年であれば12月から雨も段々と少なくなり、乾期へ移行するものと思われるので引き続き用心は必要であるが、いく分か楽になると思う。

キュウリについては降雨、種子、準備の遅れから播種をしたばかりである。種類は在来種(地道性)と本邦種(加賀節成)である。在来種は、本圃に直播を行うが、本邦種は苗箱を作成し、もみがら燻炭を使用してやっている。一般的にキュウリの育苗は、他の果菜類と比較すると高等の技術を要すると言われるので、若干不安もあるがなんとか立派に成育させたい。

水稲は先に書いたように、こちらで初めて行うものである。

品種はBG94-1と呼ばれる。3カ月半から4カ月弱の生育期間を要し、近所の農家では、大部分が直播式栽培を行っているが、どうせやるなら本格的に田植えを、それも正条植え(同じ田植えでも、この正条植えと乱雑植えといわれる方法もある)をやろうということになり、その方法でやっている。どちらが上策かと一概には言えないようである。直播栽培と移植(田植え)栽培を比較すると、収量的には移植栽培をやった方が直播栽培を上まわるということは、多くの農家も認めるところであるが、田植えをするとなると非常に多くの労力を要する為に、田植えをやりたくとも、移植栽培に移行出来ないというのが本音のようでもある。労力的に直播栽培は何しろ、耕起、整地の済んだ後に、種もみを肥料でもやるようにバラバラと播くだけであるから、田植えに比較するとまるで問題にならない。また、キャベツの際にも書いた様に、豪雨が非常に多い為に土砂の田んぼへの流れ込みも著しく、急流、カーブのある場所など、条件によっては水田の半分位まで、土砂で埋没したのを目にする事がある。一方、こういう立地条件の悪いところであればこそ、移植栽培が望ましいのではないかと反論も成り立つと思う。つまりそういう雨の多い所であれば、種もみをまいた直後に豪雨に襲われた場合、多数の種もみが流亡してしまう危険が当然高くなり、それこそ流亡してしま

うと元も子もないではないかと……。実際にこちらの田んぼに入って、初めて気付いたのであるが、耕起をするにも日本のようにトラクター、耕耘機がある訳ではないので、すべて人力。私の場合、訓練生がいたので、頭数でこなして、イヤがる訓練生を怒ったりおだてたり、あるいはなだめたり、すかしたりして、何とか無事植付けまでもっていった。植付け後も除草に追われる毎日であり、私も農家の1人息子で、これまで農作業は人並みにやってきたつもりであるが、日本の農家は機械化、農薬も豊富という中にあり、今さらながら思われているとつくづく思う今日この頃である。

一方、午後からの講義は、まだまだ英語も不十分で、また、シンハラ語も自由に使いこなす段階に至っておらず、なかなか大変である。

それでも、どうにか野菜の分類からスタートし、栽培環境、病害虫、肥料、農薬と、かけ足で進み、これから各論に入るところである。

講義は実習と違って動作で示すというのも困難であり、こちらの語学力が、即、訓練生の理解度に関係してくるので、それなりに（教える立場として）予習を怠れない。前回までの訓練との相違点は、講義の際に簡単な実験を取り入れたことであろう。教えるこちらとしても、黒板に書いているだけではつまらなく(?)訓練生も飽きがくるので、ヘッド・オフィスにリクエストをして、試験管、ピーカー、メスリダー、虫めがね、天ピンばかり、を購入してもらった。それらを使って、種子、花の構造はどうなっているのか?。種子が発芽した場合、どんな状態から根が出てくるのか?。また、少し実用的に（計量器具が非常に高いため、日常目にするもの、物品を作って）、普通のコップ、缶詰め缶、バケツ、には何ミリリットル、何リットル入るのか?（農薬を希釈くする際に利用）。コインの重量はいくら?（おもり、分銅が高く、その代用のため）。などである。

さて、以上は業務状況の報告であるが、それではその活動の効果はどうなっているのだろうか。

結論を先に書くと、正直、効果が上がっているのか、また、まだ効果が現われていないのかは、はっきりとわからず判断に苦しんでいる。しかし、あえてこのどちらかに答を出さなければならないとすれば、残念ながら効果はあまり現われていないのではないかと危惧している。

つまり業務内容が、訓練生の指導という活動対象が人であるから、打てばカンと響き、スピーディにそれも物理的に効果または成果が出てきたとは、

簡単に把握することのできにくい面があると思っている。

私は、農場において実際に野菜を栽培して訓練生と一緒に実習をしながら、諸々の管理をやっている。しかし、ここで栽培した野菜が順調に生育し、収穫までとぎつめたとしても、これを一直線に訓練生と結びつけることはできない。

なぜなら栽培は成功したが、果して訓練生がこれを理解し、家に戻った後にも、この通りにうまくやってくれるという保障はどこにもないからである。事実、訓練終了者の動向をみてみると、家業としての農業を手伝っているというのが大部分を占め、特別自分ひとりで農産物を生産し、生産農家として経営しているのは、ほとんどいないというのが実情である。

これは直接、彼等を指導した私も大いに反省しなければならない点である。彼等は彼等なりに経済基盤の問題、家族事情もあり、アフターケアとしての助言、指導、協力体制も確立されていない現状も、彼等の自営、自立へのネックになっているのではないだろうか。

帰国後雑感

牟田 基治

スリ・ランカ。現地シンハラ語で「光り輝く島」という意味である。事実、年中どこに行っても豊かな緑をたたえる樹木と、その間からこぼれる南国特有の力強い陽光、黒くてちよびり大きめの瞳の人々は、確かに美しく輝いている。帰国して随分と月日がたつ私にとっても、今でも恋しくなってしまうほどに魅力ある国である。

そんな、「光り輝く島」で過したあの2年間の隊員活動中をふり返ってみると、毎日が感動の日々で、新鮮なものであったなあをつくづく思うのである。

これと言って、特に苦勞する必要のない時代に生まれ、ありとあらゆる物が氾濫した、高度経済成長時代と共に育った私達の世代、無気力、無感動、無責任の三無世代とも呼ばれた。そんな世代の私であるがゆえに、隊員活動中に見たもの、聞いたもの、体験した全ての、たとえそれがちょっとした些細なことからも、考えさせられたり教えられた点が多かったのだろうか？

主に活動対象となった訓練生や彼等の家族の、日常生活を営むうえでの食べ物、着る物、住む家などの諸条件は、日本のそれと比較するべくもなく貧しく、質素な暮らしぶりである。水田や畑も狭く、農具にしてもお世辞にも立派とは言えず、肥料や農薬も不十分で、労働条件も大変厳しいものがある。にもかかわらず、彼等は大らかに、しかも実に生き生きとした目で大地を耕しているようで、何か私の心に訴えるものがあるようだ。

日曜日や休日には、訓練を終了して家に戻った彼等から、機会ある毎に招待され歓待してくれた。それぞれ、僅か3.5ヵ月程度の短い訓練期間中のつきあいだったが、それ以上の、まるで昔から知っている知人のように慕ってくれた。

帰国する直前には、彼等にとって決して安くはない交通費や、長時間かけてわざわざお土産を届けてくれたり、さよならの挨拶をしに来てくれる者もいた。送別会では、胸がつまり涙が流れて言葉にならなかった。

協力隊に参加していなければ、一生めぐり合うことのなかった彼等。「君達にあまり上手に教えることは出来なかったけれど、私は君達からとても多

くのを学びとることが出来たよ。また、君達という数多くの友人も作った。本当に有難とう。]

技術協力としては、何の効果も業績も上げることなく終わってしまったような2年間であったが、私にとって生涯忘れることのない貴重な体験であったと思う。

牟田隊員の報告書を読んで

齊藤 朝雄

教育については素人の私ではあるが、読み始めて最初のうちは、あまりにも困難な立場の中で目的意識も持ち得ず、教育の何であるかの見極めも出来ないままに任期が終わるのではないかと、危惧さえ感じさせた。それは、配属先の国家青年奉仕評議会の性格そのものの不明確さと、訓練センターの教育目標が設定されてないことにも起因しようが、あまりにも多い障害と困難性のため、自分自身を見失っているのではないかと考えさせる程であった。

研究や技術指導とは異なった、教育の難しさを思いつつ読み進むうち、教育についての知識が皆無に近く、野菜の基礎的知識は相当のものを持っているとしても、実際、栽培の経験の浅い彼が、短期間の間に教育者として必要な青年心理、教育原理、教育方法ともいうべきものを教育の現場の中から体得し、彼は彼なりの方法で実行に移した努力と進歩の過程が、ひしひしと感じられ、若き力の素晴らしさを知り、その後は興味深く読ませていただいた。彼は彼としての理想と使命感に燃え、任地に赴任したに違いない。ボランティア活動の隊員である彼の思いは、私の想像以上であったであろう。しかし、現実には厳しいものであった。

訓練センターの教育目標の不明確さがまず障害であり、人間関係の難しさ、教育施設の不備である。実習農場の野菜をみても、コロンナツツやバナナの根元に僅かに植えられた唐辛子であり、これで何が出来るか、憤りと惨めさを感じたであろう。

訓練生自身の入所の目的意識の低さと、終了後の展望のなさ、3カ月の短期間に基礎学力に乏しい生徒に何程のことが出来る等々と、訓練計画作成以前の隘路が大きく、加えて、英語しか話せぬ彼にとっての教育手段の悩みは大きいものがあつたと想像出来る。

その中で彼は、訓練計画についての意見が取り入れられない不満を残しながらも、実習については、言葉の不十分な分は身を持って示す方法をとり、他国のボランティアの雑言に悩まされながらも、「国じボランティアであっ

でも、方法としてインドネシア式、日本式の方法があってもいい、俺は俺の方法でやってみたい」と、彼なりの信念を持って訓練に入っている。

しかし、当初において意欲は買うとしても、「とにかくこちらで良く見かけることが出来る比較的栽培の容易なものを、こちらの方法で行なった」で見られるように、教育的にはあまり感心したものではなかった。

野菜についての教育者であるなら、準備期間がほとんどなかったとしても、教育の目標を定め、現地の気象条件、立地条件から、導入されている野菜を決め栽培すべきであり、そのことが、「オクラ、ナス、インゲン、トマトを栽培したが、あまり良い成績ではなかった」に通じている。結果如何より目的としたものへの追究と、今後の改善点なり、今後の目標の設定する姿勢こそが、教育者として必要なことではなかっただろうか。

その後訓練の経験も重ね、また、彼自身の努力もあり、訓練計画も体系づけられ、簡単な実験を組み入れ興味を持たせながら、必要な学習を進める等の工夫をし、カリキュラムを余裕さえみせながら消化するほどに急成長しているのには感心した。

しかし、欲を言わせてもらえば、この報告書は彼の活動記録であると同時に、今後彼の後を継いであらゆる分野で活動する隊員の参考となるものであろう。そうだとすれば、講義内容の項目の組み立ては立派なものであるが、短い訓練期間にこれだけのことを含めて消化することは、到底不可能に近いものである。各項目ごとのポイントを明確にして欲しかったと思う。

また、講義の構成についても工夫がかなりあったと思う。例えば、前回の講義のポイントと今日の学習のポイントから本論に入り、最後に今日の学習のポイントと次回学習の予定といったものが、日本の高校以下の教育的手法かも知れないが、相手によりその手法も重点度も違ったはずである。

また、質問を折り込んだり、討論を入れたり、その他種々の工夫をこらし講義したはずである。相手に最も効果的に、さらには意欲を持たせる教育手法の工夫の経緯が、参考になるのではあるまいか。その記述が欲しかったと思う。

彼は、日本では到底経験することの出来ない貴重な経験をした。長い人生の中で計り知れない貴重なものである。この経験を生かし、今後益々発展することを期待するものである。

(協力隊技術専門委員)

農村開発省での手芸指導

第1～4, 6号報告書
職 種 手芸
氏 名 井岡 弘恵
配 属 先 農村開発省

井岡隊員の略歴

生年月日 昭和31年12月20日

出身地 愛媛県

学 歴 琉球大学法文学部卒

派遣期間 56年4月～58年4月

1. 任地ガリガムーアに赴任して

4月21日、2週間の語学訓練（シンハラ語）を終えた3人は、各々配属先の任地へ向かった。私は配属先の人と、今日がジューキミンセンターのオープニングの日であるという、任地ガリガムーアに車で向かう。本当は4月17日にオープニングの予定だったものが、私の配属の日に合わせてこうなったとのこと、私がジューキミンコースを受け持つ件に関しては、ここスリ・ランカに着いてからずっと問題となっていた点であり、要は私がそれだけの技術を修得していないので、はたして教えられるかどうかということにかかっていた。

結局のところ、語学訓練中に話を決めて頂き、私はジューキの方は補助的に援助し、主としては手芸・洋裁コースの方を受け持つことに決まった。さらにジューキコースには、現地のインストラクター（2年程の経験をもつ24歳の女性）をつけることになった。

ジューキコースは今回初めてであるが、手芸コースは以前から行なわれているもので、1階が旅行者向けの店（手芸品を売っているのであるが、客らしい客も来ない。それに、一目見て買いたいと思うような商品が、正直言ってないといった感じなのである）、2階が手芸教室、ジューキセンターは隣接して別に新しく造られた。

生徒はジューキコース12名、手芸コース10名、いずれも20～30歳の農村女性である。手芸コースには以前からの先生がいる。そこに私が配属された訳である。もともとは、ジューキミンがあるからここに2、3カ月居て指導し、その後は他のセンターへ、手芸・洋裁のボランティアとして移動するといった要望で、このガリガムーアに配置されたのである。しかし現状は、ジューキの方は例のインストラクターがしっかり指導しているので、私は必要ない。よって、私の仕事は手芸・洋裁ということになり、2人の先生が生徒10人をもつことになった。

仕事はといえば、朝8時30分頃からぼつぼつ生徒が集まって来て、仏陀に花を供え、わりと長いお祈りをささげて、授業に入る。授業といっても、最初の頃は何をすることも材料がない。そしてもう1人の先生（みんながマダムと呼ぶ。ついでに、私とジューキの彼女は独身であるから、ミスになる）の様子をみても、別に何を教えるという訳でもない。生徒達は、日本から来た

私をめずらしそうに、そして何かすごいことをやるのだらうという目で、私の回りに集まってきて、“モソワダカラネ？(何をするのか?)”と聞く。1日目などは、鶴を折ったり折り紙あたりを教えて、どうにか時間を潰した。

次の日には、生徒の1人が端切れを持ってきて、これで人形を作ってくれと言う。どうにか小さい人形を作ってみせると、みんなが喜んでくれた。“ラッサナイ！(きれいだとか美しいとか、ステキだとかいう意味)”と言う。これがきっかけで、次の日から人形作りが始まる。

しかし、材料といったら、本当に日本でならごみ箱行きになりそうな、小さな古い布切れである。私も何かと捨てずに、ごちゃごちゃごみのようなものを取っておく癖があるが、彼女たちに比べると、私なんて足元にも及ばない。これは、スリ・ランカ人みんなに言えることである。こんな小さな布切れで、何ができるのかと思われるようなものでも、何かが作れるというのは非常に私にとっても嬉しいことであるし、また趣味でもある。だが調子にのって作っていると、みんなが作れと言うし、すぐに、分からないからやってくれという具合。それに対して私は、必死で、自分でやれと言い返す。

こういうことをしていてもしょうがないと、何が必要かリストを作り、A. G. A's. office (Assistant Government Agent's office) に提出し、それが来るのを待っていたが、2週間しても何も言ってくれない。これでは仕方ないとマダムに話すと、リストをなくしたからもう1度書いてくれという始末。そして、やっとお金をもらって材料を入手した次第であるが、材料といっても僅かで、これでどうやって教えていこうかという感じである。

とにかく、毎日小さな事がいろいろ起こる。とても全てを書きつくせない。毎日8:30AM~4:00PMで、朝、昼、ティータイムらしきものがあり、時間的にはそうきつくもなさそうに見えるが、1日同じ教室で、言葉もカタコトの英語とシンハラ語、材料もろくにない、授業のスケジュールがある訳でもない等々で、やはり精神的に疲れるというのが本音であろうか。

このガリガムアは、私の配属先の女性大臣 (Mrs. Kannangara) の出身地であり、ここを榮えさせようというのでジューキミンコースも設けられ、私が配属されたということのようである。彼女の家は、私の下宿先から5分位の所にある。つまり下宿は、彼女の知人を紹介してくれた訳である。それで、大臣に会う機会を2度程もった。

1度目は、どのくらい今のガリガムアに配属となるのかを聞くためのも

農村開発省での手芸指導

のであったが、今のセンターは良くないので、またすぐに他のセンターに私を移してやると言うのである。そう言ったり、私の好きなようにしてよいと言ったり、少々大臣も多忙というか、話に一貫性がないので、こちらも戸惑ってしまう。

2度目に会った時には、今度のウェサックの祭典に、寺院で我がガリガムーフセンターから出店を設けて作品を売る、それと同時に、日本からのボランティアとしてのデモンストレーションとして、何か作品を作って展示してくれという話を受けた。それからというもの、毎日、センターではバラ、ポピー、カトレアなどのフラワーメイキング、家に帰っては折り紙や人形作り等を始めたのであるが、結局は寺院の出店の場所が借りられないということで、ぎりぎりになっておじゃんになった。この連休もつぶして、作品作りを生徒としようと少々気負っていたところであったから、力が抜けたというか何というか……。しっかり第1球は見のがしました！

いったい大臣は何を考えているのかという感じで、家のアンマー（お母さんという意味で、私はこう呼んでいる）も、“She is jumping, exciting……, She is mad,!”と言って笑って見せる。しかし、いつもやさしく接してくれ、憎めない人である。

本当にスリ・ランカの人々は、とても親しみのある態度で接してくれる。目と目が合うと、必ずといっていいほど微笑む。ものめずらしさも手伝ってであろうが、親切である。さらに、田舎だから、どこを歩いてもみんながめずらしそうに見て行く。我々が外人を見る目と同じだなあと、ふと思ったりもする。しかし、あのニヤニヤ微笑む顔がうらめしくもなることがあるが、表面的には、あくまでも親日的である。

とにかく貧しい国で、一家族の月収が300ルピー（約3000円）以下という人々が50%を占め、国の補助（Food Stamp）を受けているという。生徒の持ち物、服装を見てもそれが窺え、複雑な気分になる。私の持ち物は全て、“ラッサナイ！”のである。

私の下宿先でさえそうである。御主人を亡くし、アンマーと娘とその子供、そして使用人3人という生活。3人の息子さんの上2人は、アメリカ、オーストラリアに居る。下はホテルで働いていて、娘の御主人もコロンボで働いているという。私から見ると上流社会に入る家庭であるが、生活はやはり質素なものと言えるだろう。亡くなった御主人が、日本に研修に行ったことが

あるというので、あれこれ興味を示してくる。英語とシンハラ語の両方が話せるので、私としてはシンハラ語も上達せず、かといって英語もブローケンであり、中途半端な感じがする。

1カ月と半月の、スリ・ランカでの私の生活。どうにか慣れつつあり、これからいろいろな面が見えてくるというところであらうか。今はまだ、スリ・ランカ人にとっても私にとっても、お互いに初めての経験であるので、ものめずらしさも手伝って、相手の顔色を窺っているというか、遠慮し合っているという感じが、本当のところのようである。



職場の生徒・インストラクター、下宿の主人と筆者

2. 配属先・農村開発省

雨が降らなければ水不足になるのはいずれも同じであるが、日本と違って断水の心配はない。その代わりに、数時間停電の日々が続くことになる。それにしても、停電・断水と心配できるのは、文明の利器の恩恵を受けている所以であらうが。

電気の普及率は高いにしても、水道のそれはまだまだである。町の中では道端の共同水道で水浴びしている人々をよく見かけるが、田舎になるとほとんど、井戸あるいは泉を有し、その水が生活の全てを支えることになる。

8月といえば、今年は猛暑と聞かれる日本と比べ、ここスリ・ランカの方が過し易いようである。少なくとも、緑豊かな私の住んでいるこの田舎町で

農村開発省での手芸指導

は、朝夕あるいは雨が降り続くと、気温も26℃位まで下がり、朝方などは肌寒さを感じる程である。一言に熱帯地域といっても、様々な自然的・人工的要因によって気候が異なることを、あらためて知らされたような気がする。

さて、仕事に就いて4ヶ月が過ぎようとしているが、その様子を記述してみたい。

私の配属先は、唯一の女性大臣を戴く農村開発省である。正直なところ、この省の機構・組織なるものを明確に把握し得ないのであるが、この省の役割を派遣課資料に読むと、農村部の、主に人的資源の開発にあるということである。

- ①Rural Development Society や、村人の組織を通じて社会的・文化的・経済的な状況改善に村人自身の参加を促進する
- ②村の貯水槽、水路などの修理のために、村人の自発的な参加を促す
- ③Rural Development Society や、農村開発に関与している役所の職員に対して、トレーニングを行なう
- ④農村開発に関係している団体に、資金的な援助を行なう

というのが、この省の役割とされており、具体的には、各地方に小単位の Rural Development Society を組織したり、村人自身が自分達の村を良くするための側面的援助をしたり、さらには Rural Women's Development Work なるもので、女性の訓練をしたりしている、ということである。

私の仕事に関係するのは、最後の Rural Women's Development Work で、全国各地に約147ある Rural Women's Development Training Centre において、農村女性に手芸や洋裁の技術を身につけさせ、少しでも彼女達の生活の糧を稼げるようにすること、あるいはそれに加えて料理、園芸、家族計画、衛生管理といった生活改善全般にわたって教えることが、主な目的となっている。

この Training Centre は、大臣自らが押し進めているものであるが、一方これとは別に、Leadership Training Center なるものが国内に11あるという。これは次官の押し進めているもので、やはり婦人向けの訓練が目的である。つまり、この省の大臣と次官の目指す方向に食い違いがあるらしく、まったくお互いが関与していない状態である。大臣は、次官の Leadership Training Centre には、強く反対している。

ところで、先に述べたように、私は大臣の指揮下にある Rural Develop-

ment Training Centre に配属された訳であるが、任地はさらに彼女の出身地内に存在する。いずれにしても、彼女のおひざもとであるのでこの地域への力の入れようが並々ならぬものであることは、ジューキミンのトレーニングコースをここに配置していることでも察せられる。

私のいるセンターは、規模的にも大きく、近代的な外見を有する。1階は旅行者向けショッピングルームで、他のセンターで作られた手芸品やら衣服を集めて売っている。そして2階は、私の受け持つ手芸・洋裁クラスである。それに隣接してジューキミントレーニングコースがあり、直線縫い10台、カッティングミシン2台、刺繍用ミシン2台（すべて工業用）が設置してある。さらにすぐ裏には売店兼食堂があり、ちょっとしたものを売っている。

現在、この台所の増築やら内部の改装を行なっている。何故なら、この一帯は水田地帯で、その中にボツンとこれらが存在するのであるが、さらに近くに A. G. A. の事務所があり、それに加えて、もうすぐオープンするという技術研修センター（男子向けコース）が数棟建造中であるからである。すなわちこの一帯は、この省の役割であるところの農村部の人的資源開発の中核をなし、その代表的事例であると言えよう。

こうして見ると、こういう一つのまとまった集合体のような形で、各地域に Rural Development Society が存在するのではないかと思われるが、規模からいって、あるいは彼女の出身地という観点から見ても、このガリガムニアは最大級のものと思われる。

3. 最初の活動状況

最初の2カ月余りは、以前からいたインストラクターと2人で手芸クラスを持っていたが、彼女が転勤になった後は私1人で教えている。当初は、彼女の教える様子を観察できるだろうと期待していたのであるが、米たり米なかつたり、米でも私に遠慮していたのであろうが、これとって教える訳でもなかった。私としても、手芸の材料もなく、何から手をつけてよいかわからない状態であったが、それに加えて生徒達も米たり米なかつたり、米たと思うと自分の服を縫うためであったり、ひどい時にはおしゃべりにだけやって来る生徒もいる始末であった。

フリーのトレーニングセンターであるから、いたってのんびりしており、家の仕事があれば来ないし、やって来ても暇つぶしにいるような感じを受け

農村開発省での手芸指導

た。服を縫うのを見ていても、とにかく着ればよいという感覚でさっさと布を裁ち縫い上げ、あげくの果てには着れないものを縫ってしまって、私のところに持って来る生徒も少なくなかった。

彼女達の大部分は、2年以上もこのセンターに通っており、縫う技術はもっている。ただ、見た目にきれいに仕上げようという意識が欠けているのか、早急に縫い上げればよいという感じなのである。それでは布がもったいないと、私は型紙を使って裁断することを教えた。かと言って、型紙を作る基礎から教えている余裕がなかったので、生徒各人のブラウス、スカート、サリーのジャケット等を作って与え、それを使って少しでもきれいに仕上げることがを指導した。今は自分の服やあるいは家族のものを縫う程度であるが、今後は型紙作りの基礎から教える必要があると考えている。

手芸に関しては、与えられた予算で材料を買い、フラワーメイキング、人形作りを始めたが、予算をもらうと同時に、大臣から何か作品を作って展示してほしいという要請を受けた。その後は、何か行事があるたびに、予算を与えるからあれを作れこれを作れという注文を受ける始末である。

元々このセンターの目的は、農村女性に訓練を施し、少しでも彼女達に収入をもたらそうとするところにあるのであるが、今のところ、手芸品を作り1階のショッピングルームに展示したところで、なかなか売れないで古く色あせるのを待つようなものである。すなわち、旅行者向けの店なのであるが主要道路から少し離れて存在するゆえに目立たず、旅行者の姿を見ることもない。要するに、作品を作っても問題は需要がないということである。よって私としては、予算をもらって売れない作品を作るよりも、生徒のもち寄った材料で、手芸なり洋裁なりを教え、それを彼女達自身のために持ち帰ることが出来る方法を望んでいる。

しかし一番良いのは、オーダーを受けて生徒達に縫わせ、それで収入を得ることである。これは、たまたま現在オーダーがないのであるが、以前から時々オーダーを受けて、ハンカチやらビローケース等を縫っていたようである。むしろ生徒達は、このオーダーを期待してこのセンターにやって来ているので、それが無い現在、出席率が悪いのは当然かもしれない。しかし逆に言えば、私の仕事は、こういうオーダーのない時期に訓練を施すことであるといえる。

この4カ月近く、与えられた予算で買った材料を使って、新しい手芸技術

を教えたり（小物作り、パッチワーク、マクラメ等）、アイデアを提供したり、あるいは彼女達の持ち寄った材料で洋裁を教えるという協力活動をしてきた。しかし、毎日何らかの技術を教授出来る程のスケジュールがある訳もなく、またスケジュールを作ること自体非常に難しい。むしろ、その日その日やって来る生徒によって、何をすることが決まってくるというのが現状である。1日が、生徒にとってただ新聞を読んだり、おしゃべりをするだけで過ぎてしまう日があることを、今の私には否定出来ないのである。

4. 任地移動を控えて

手芸の新隊員の派遣に伴い、私を他のセンターに移し、彼女を今の私のいるセンター、つまり大臣の出身地のセンターに入れるという考えを、大臣が私の生徒に話しているのを聞いたのが9月上旬である。その時に、10月、11月、12月は、セールの季節だと聞かされる。

今までは、展示だけで売れる機会は少なかったが、これからは作品を売る時期だと、興奮した口調で大臣が話す。よって、まずは10月3日に、隣接して存在する男子向け技術訓練所がオープンするので、その日に向けて作品を作ってほしいと要請を受けた。予算はすぐに渡すということ。ちょうどオープニングの1カ月前のことであった。

この時点で任地の移動を知ったのであるが、実際のところ、現在までまったく公式にあるいは事務的に、私に直接に任地が変わることを伝えられていない。それは生徒の噂話であったり、周囲の雰囲気すぎなかった。しかし大臣と私の仕事については、いつもこんな調子である。いずれにしても他のセンターに移ることは確かだろうと思い、すると新隊員が現地訓練を終え、実際に今のセンターにやって来るのは2カ月後であるとわかった。事がそう決まると、今度のオープニングでは作品を是非売りたいと、意欲を燃やしたものである。そして最後の1カ月は、今まで教えたことのまとめをやろうと考えていた。

10月3日のオープニングに向け、忙しい毎日が始まった。生徒には、手芸作品作りの他に、センター所有の畑を耕し野菜を植え花を植え、その管理という新しい仕事が付け加えられた。よって休日もない1カ月であった。そして教室では、売れる作品は何か、とにかく売れないと作ってもどうしようもないから、売れることを念頭において生徒に作品作りをさせた。ところが

農村開発省での手芸指導

2週間たっても予算がおりにないので、A.G. A. の事務所 (Assistant Government Agent—政府の地方事務所) にすぐにおろしてくれるよう頼み、やっと入手した。それが、オープニングのちょうど2週間前である。

さて、予算を得たから急いで材料を買って作品作りに取りかからねばと思っている矢先に、大臣に呼ばれていくと、前に言ったこととは違う注文やら、あれこれこうしろああしろと、細かくリクエストを受けるはめになる。その後は花造り、人形作り、バッグ作りなどを、生徒に分担させて作らせる。とにかく10月3日の前日まで、センターの飾り付けやらオープニングセレモニーの準備やらで大変であった。

まあ、オープニングは成功したと言える。作品もわりと売れ、いくらかの収入があった。給料ももらえず、ただ働きでみんな良く働いてくれたと思いつこの収入を生徒に分け与えることを提案した。ところが、生徒によってはさぼっていた者もいるし、一生懸命やってくれた生徒もいるので、それを考慮に入れるとやはり分配できず、結局、それで材料を買おうという意見が出た。そうして、オープニングが終わってからは、買った材料で比較的人気のあったバッグ作りを中心に教え、それと同時に、今までに教えたものを整理・まとめをすることにした。

こういう風に何か行事があったりセールが可能なら、つまり材料があり作品を作ろうという時は、わりと仕事を一生懸命にやる。しかし普通はいたってのんびりしているので、私が怒ることもちよくちよくある。とにかく飽きっぽい。自分でこれをやりたいと持って来ても、2、3日すれば他のことをやっているという具合である。1日のうちでも、しょっちゅう休んではフラフラしている。おしゃべりが大好きである。自分で進んで何かを学ぼうという意欲に、正直言ってかけていて、今の自分に満足しているようでもある。

ところが、最近急に出席率がよくなり、みんな真面目にノートを作ったり見本を作ってノートにはったりしている。新隊員が来たことももちろん一つの理由であるが、それには大臣の一言が効いたらしい。すなわち、大臣は生徒達に、日本のボランティアつまり私達から習った技術を修得したなら、近い将来他のセンターに各人1人ずつ送って、その技術を教授できるようにするつもりだと言ったという。よってそれからというもの、生徒達は必死でノートを作って整理している。これが本当に実現すれば、私達としても1番教えがいのある方法である。こういう方法で少しでも多くの人々に技術が伝播

できれば、それこそ私達の協力活動も無駄ではないと言えるのであるが。

11月16日をもって、今のセンターの仕事も一応新隊員にバトンタッチする予定である。そして任地が決まるまで、待機することになりそうである。約7カ月の協力活動であった。いったい何がやれたかと聞かれると答えに窮するが、1人の外国人がやって来て、やたらと今までとは少し違うことを怒りながらあれこれ言って帰ったと、なんらかの形で彼女達の頭の中での刺激の役割を果たすことが出来たのではないかと思ったりもする。私がやって来た当初に比べれば、少しではあるが彼女達の頭の中に問題意識が住みついてくれたのではないかと、勝手に想像して自分を慰めたりしている。

これから新しい任地が決まるまで、他のセンターを回って見るのもおもしろいと考えている。さらにはこの国独自のパティックと呼ばれる染色技術を学ぼうとも考えているところである。

5. 任地移動とセンター巡回

毎日暑い日が続いている。ここ2カ月以上雨らしい雨は降っていない。まさに乾期の様相である。

さて、昨年12月上旬に、新任地 Uda-Peradeniya にやって来た。

昨年10月の同職種の長谷川隊員の派遣に伴い、私の移動の話が配属先の女性大臣から直接聞かされた。11月前半は、新隊員と同じ職場・下宿で過ごし、引き継ぎを行なった。その後、私は大臣から新任地の候補地として上げられていた三つの地域へ、調整員と様子を見に行く機会を得たが、私としては何処でも示された所へ行こうという気持ちであった。

ところで、以前から他のセンターを巡回してみたいと思っていたが、それを実現してみても、大体この Rural Women's Development Training Centre なるものの様子が窺えた。つまり前任地ガリガムア・センターは、設備・規模共に異例であると言えるようである。大臣の行政地区ガリガムアに力を注ぐ理由は容易に理解出来るが、それにしてもあまりの差の大きいことに驚くばかりである。

センターとは名ばかりで、一般の民家で生徒達が学んでいたりと、あるいは電気、水道の設備もなく、ミシンは4、5台あってもほとんど使用不能であったり、机、椅子にしても充分でないというのが実情であった。ただそれにもかかわらず、生徒達の学ぶ姿勢は、私に新鮮さを与えた。

大臣の指揮の下に運営されているガリガムーンでは、設備のすばらしさが生徒の訓練活動に必ずしも反映されていない。むしろその逆で、彼女の冒動を気にしながら、言われる通にするしかないのである。まさに腫れ物に触るがごとく、すべてが彼女のやり方通りであるから、生徒の活気もなく、意欲・個性を発揮しようにも難しい限りである。そんなガリガムーン・センターに比べて、他のセンターは予算もなく設備も不十分であるが、私には自由でのびのびと学んでいる印象が強かった。

ところで、11月下旬に、明日新任地(候補地とはまったく別の所)に移り、その翌日からさっそく任務に就くようという手紙を大臣から受け取り、調整員との話し合いで、新任地へ出向き様子を見た上で、12月5日に本格的に移ることになった。

6. 新任地での活動

新任地は小高い丘の中腹に建てられた、以前機織りセンターだったものを改修して、昨年10月にオープンしたといわれるセンターである。ただ広いセンターに、電気、水道はなく、机、椅子も十分ではない。ミシンは数台存在するが、常時使用するのは2、3台である。生徒数は、私の移った当初はちょうど公立の学校の冬休み(ここでは冬休みとは呼ばないが)で、12、13歳以上の女子も参加し、多い日には50人程度の生徒が集まり、なかなか大変であった。現在は学校も始まり、正規の生徒だけである。

現在17名の生徒数で、17歳くらいから20代後半の独身女性ばかりである。もう1人、現地で14年のベテランの胸を持つインストラクターがいる。彼女が、このセンターのオープン以来、生徒に手芸と洋裁を教えている。私の配属先の農村女性トレーニングセンターのインストラクターは、だいたい同じ洋裁の技術指導内容を持っているようで、それに従って生徒に洋裁を指導している。

この新任地の彼女は、洋裁の基礎縫いのサンプル作り、ノート作り、さらには子供服から順を追って婦人服へと教えていく予定のようである。それらの合い間に、ちょっとした手芸を指導しているが、それを手助けし新しいアイデアを提供するのが、私の主な今の仕事である。さらに私は私で、生徒達に洋裁の型紙作りから教えることにした。彼女は週2回、他のセンターに新米のインストラクターの援助に行くことになっており、よってそれらの日々

は私が独自に指導している。

このセンターでの業務は2カ月余りになるが、新任地に伴いがちな不安はすぐに解消され、慣れるのにさほど時間を必要としなかった。というのも、以前のセンターを見ているだけに、すべてが新鮮というか、こんなにも異なるものと驚くやら感心するやらで、私自身教える意欲を奮い起こさせられる思いの方が強かった。しっかりした先生の下で、私は影のような存在であったが、それで当たり前だと思ひ、毎日少しでも新しいアイデアを提供するよう努力している。やはり、新しくオープンしたセンターだけに、手芸の技術は生徒に新鮮に映るらしく、以前のガリガムアでの7カ月の協力活動で自ら学んだ技術も提供出来るし、スリ・ランカの若い女性達の趣味や好みも大体つかめるようになっていたので、かなりその点助かり、ここでの協力活動は驚くほどスムーズな出だしである。

ただ問題を上げれば、何処も同じであろうが、予算がなく全て自費で材料を購入しなければならず、それは取入のない彼女達には負担になることは間違いない。彼女達自身の材料で作ったものは、大部分展示会のためにセンターに保存してある。それを他のセンターでの展示会や、我がセンターでも展示会を持つ予定であるので、そういう機会にそれらの作品を売る計画なのである。作品が売ればその売り上げを予算に、再び新たに材料を購入するというのが理想なのであるが、まだ現在はそこまできず、難しいところもある。

しかし、このセンターはスリ・ランカ第2の都市に近く、大市場を有しているので、町に作品を出し売り上げを得ると言うことが可能ではないかと、あれこれ思索しているところである。作品が売れ、それを元手にさらに作品を作り、売りに出し取入を得ると言うサイクルが最も理想であり、今後そのルートに近づけるよう努力していきたい。

さらにこのセンターでは、アントリアム・プロジェクトをかかえている。アントリアムの花は、スリ・ランカのホテル等でよく見かける花であるが、私達のセンターから少し離れた所に、その畑と呼ぶべきか庭が存在する。大臣が予算を出し、この地域に誘致したものであるが、規模は小さく、さらにひどいことには、きちんとした管理者がいなく、我が生徒達が花の世話をかけ持っている。軌道に乗るには、しっかりした管理・世話が必要であるが、その予算もない状態で、それゆえ生徒も強制されないと自主的には動かず、

農村開発省での手芸指導

このプロジェクトも大臣の無計画性をちらちらのぞかせているような感じがする。

これとは別に、センターの前庭では野菜を少し作っている。これには時々生徒全員で作業に就く時間を持つ。また、月2～3回菓子作り（いずれは料理全般にしたいものだが）の時間があり、スリ・ランカの菓子等を、教室の角に置かれたレンガの炉に薪をたき、生徒達は器用に作る。さらには月1度位の割合で、農業省のインストラクターがやって来て、食生活の改善の講義や実演を行なってくれる。

このように、本来のこの農村開発省の Rural Women's Training Centre の目的である生活全般にわたる改善の訓練を、うまく組み合わせて行っており、その活動は活発であるといえる。

7. デモンストレーション活動の成功

当初、Uda-Peradeniya のセンターから、また他のセンターに移るという予定であったが、それが延び延びとなり、結局のところ、我がセンターの1年コーストレーニングの仕上げとして催される展示会を待ってからと考えているうちに、種々の理由により、それが今年2月の末にまで引き延ばされた。よってこの件に関しては、他に移ることなしに同センターに落ち着き、2年間のまとめを行なうことになった。

さて、それとは別に問題提起をしていた、我が省に配属されている私と長谷川隊員、それに加えて、農村工業開発省に配属されている秋元隊員（陶磁器）の3人で、作品展示会も1度催せないかという案を出していたことに関して、この意見がどうなったかを述べる必要がある。

駐在員には、大まかにそのような案があるとのめかした程度の段階であったが、それを各隊員に相談し、他の隊員達の協力をも仰ぎたいということをつたえた上で、とにかく、コロンボで大展示会を行ないたいという意見を、臨時に見えておられた八林氏に打ち明けてみた。その結果は予想以上に厳しく、今の状態ではまだ危険すぎることを、そしてもっと長い目で地道に協力活動が続けて欲しいということ指摘された。

展示会を催すに当たっての問題点として、

- ① いったい誰を対象に催すのか。スリ・ランカ人か、それとも旅行者向けなのか。あるいは在住日本人に向けてか。対象層によって展示の内容も

変わるの、それを明確にしなければ困難ではないか。

③協力活動を紹介する意味での展示会とするには、2年は短かすぎるのではないか。

④活動をも広く紹介するのであれば、今後の協力活動をスムーズに行なうに当たって、失敗は許されないという覚悟が必要ではないか。ただ単に2年というくぎりの長さや、他の隊員をも含めた協力活動状況の紹介、日本紹介というのでは、主旨が不明瞭で安易すぎるのではないか。

④現在の段階では、もっと初歩レベルに視点を置き、各省での展示会開催程度を省に提案してみてもどうか。それを踏んでから次のレベルを考慮してみても。

等々、我々隊員同士で話し合っていたあやふやな展示会構想というものに、かなり明確な意見・助言を頂いた。考えてみれば、確かにステップの踏み方が逆であったのかもしれない。

それではまず省に提案してみようと、長谷川隊員に相談する。すると彼女の方も、同じ省に二人配属されているのであるから、2人で何かやれないかと提案してきた。以前から考えていた案であったが、1番効果的協力活動はインストラクターレベルの人達を集めて指導することであり、それでは2人で各地区を回り、1カ所に先生方を集めて数日間デモンストレーションを行なうことが可能であろうと、この案を持って省を訪れた。さらには、デモンストレーション後に各センターを回り作品収集を行ない、コロomboでの展示会を催せないかという案をも相談するつもりでいた。

さて省では、私達の担当であるセクレタリーが、デモンストレーションの件はコロomboにある省の研修所を使用し、各センターからインストラクターを集めて行なうのはどうかと助言してくれた。機会を2度に分け、30人の先生に3日間ずつのデモンストレーションを行なう。全国に約150人位のインストラクターが存在していることを考えれば、その半分程度に過ぎない対象者数であるが、まずは手初めにどの程度やれるか、先生方の知識・技術レベルはどのくらいのかを理解する意味をも含めて、実行に移すよう話は決まった。そしてその後のセンター巡回、コロomboでの展示会の案も賛成を得、残すは大臣の意見あるいは許可を仰ぐのみ、というところまで話は進んだ。

実際、大臣がどう出るか内心気が気でない、落ち着かない状態で返答を待っていた。案の上、予定していた期日の2週間前になっても何の連絡もなく



デモンストレーション風景



Uda-Peradeniya での最後の展示会（右側が筆者）

再度状況を聞きに省を訪れると、大臣からの返事がもらえないとのこと。許可を受けたのは1週間前であった。さらにコロンボでの展示会の件は、彼女自身が忙しいこと、そしてなんと予算がないという返事に、皆がっかりさせられた。

とにかく、いずれにしてもデモンストレーションの件はOKが出て、慌て

て長谷川隊員と準備を開始した。

まず支援経費を受領し、材料はこちらが用意した。そして準備した手芸項目としては、袋物（婦人用、旅行用バッグ、スクールバッグ、小物等）、帽子、人形・クッション類、編み物（レース編、毛糸編）、造花の5項目、そして洋裁項目としては子供服数種を組み入れ、すべての作品の型紙を準備し作り方を簡単に示した封筒に整理した。

30人を5グループに分け、1グループに1項目を与え、各人に型紙を写す作業と1作品を製作するよう指示した。3日間の第1日をその作業にあて、2日目は項目を交換、3日目はその仕上げと、午後には省からセクレタリーを招待し、3日間のデモンストレーションで作製した作品の展示・品評会なるものを持った。

この際に、今回のデモンストレーションの意見・感想を先生方から聴取し、さらには彼女達が現在各センターでかかえている問題を、省の方に打ち明ける機会を持つことが出来た。

このデモンストレーションの結果は予想以上に好評であり、長谷川隊員にも、今後再びこういう機会が持てるという自信と意欲が得られたようである。

もっと早く事を起こしていればよかったと、私としては後悔が先に立つが、やはりこれも、任期がある程度重ねた時期的結果であろうとも思う。

彼女が大臣の地位に就いてからは、1度もこういうデモンストレーションが催されなかったと言われ、先生方にとっては久々の刺激になったようである。3日間では短かすぎるから、せいぜい1週間のデモンストレーションをやってくれとか、各センターを回って指導してくれとか、とにかく、どうにか今回のデモンストレーションは成功に終わったようである。

前述したように、デモンストレーション後も、結局他のセンターに移らず、我がセンターの1年コースの仕上げとしての展示会を、2月27日に持った。この展示会も予想以上に客が入り、作品が売れ大成功に終わり、一安心をした。

さらに、私の協力活動のしめくりとして、3月26日～28日の3日間、農村社会グループ主催による展示会が開催され、それに我がセンターも参加した。

これにはただオープニングに参加した形となったが、1年3ヵ月余り指導

農村開発省での手芸指導

してきた生徒達が、てきばきと作業している様子を見て、どうにかこの国での協力活動を、無事にそして少しは彼女達に役立てたのではという、甘い気持ちが一瞬と心に浮んだ。

帰国して思うこと

井岡 弘恵

今は昔、確かにこの私もスリ・ランカで青春の2年を過ごした、というのが今の実感であろうか。あっという間でもあり、長くてどうしようもない2年でもあり、楽しくもあり辛くもあり、成功のようでもあり失敗のようでもある、相反する感情が交錯し、月日がたつにつれて自己満足に陥り、甘く評価してしまおうようである。いずれにしても外的には、「はいお疲れさま、ご苦労さまでした。」という、なんとも曖昧な評価しか得られなかったことは事実である。

意気込みを持って出発した隊員達が受けるカルチャーショックというのはむしろ日本に帰国した段階のそれの方が、強烈ではないかと私は信じて疑わない。

成田に降りたった瞬間、あるいはそれ以前、すでに関東平野の上空を飛び始めた瞬間から、忘れていた美しくも冷やかな、目まぐるしく変貌を遂げてゆく文明社会に引き戻されたような気がした。確かに2年の空白で島国日本は偉大な母国に映り、私を歓迎し、そして私を冷笑する。2年振りの日本は私にとって嬉しいというよりはむしろ、今後の社会復帰への困難さを印象づけた。

事実、帰国して2、3ヵ月というもの、他国を見聞しているような客観的な雰囲気、不思議な疎外感——これはむしろ私が日本社会に対してである、外の世界とのアンバランス、等を痛感し落ち着かなかった。何げなく見ているテレビのCMが私に、日本は狂っていると実感させる。物の氾濫、一見平和過ぎる社会、コンパクト人間、建て前と本音、すでに斜陽期に向かって進みつつある暗いイメージが付きまとう。

スリ・ランカにいる知人が、昨年夏に起きたシンハラ・タミール抗争も治まった頃に、その後の様子を次のように表現してきた。「人々は1,000人以上のタミール人が殺されたことを忘れてしまっているかのようで、以前と同様のんびりと暮らしている。人種暴動も北部のテロも、この多民族国家では秩序を保つための文化装置のように数年おきに、まるでベラハラ祭り（スリ・

ランカを代表する祭り)のように続いているようだ。」と。

この文章に、途上国の途上国たる所以が読み取れるような気もする。この抗争によって、国力の向上に20年もの遅れをとってしまったと言われ、誰が利を得たわけでもないと言かされると、彼らはいったい何のためにと疑問を持たざるを得ない。人間、平和過ぎると刺激を求めるものなのであろうか。

私の生徒達は、今だに仕事も見つからず家にいるという。共に教えていたインストラクターからも、材料がなくてセンターを閉鎖しているとの便りが届く。現地隊員からは、いったい何のために協力活動をしているのか分からなくなってくる、と苦悩している様子を伝えてくる。いったいよそ者の私達に何が出来るというのかと。

帰国してすでに10カ月が過ぎ、隊員としての2年間の過去の思い出へと変化しつつある。帰国当初、隊員募集説明会に参加したり、あるいは人から2年間の感想を質問されると、つい「2年間のんびり遊んできました。楽しかったですよ。」と、軽く口をついて出てきたが、自分を卑下した表現とするには、あまりに安易過ぎることに後になって気付く。真剣に聞く後輩を戸惑わせるだけに終わる。目に見える顕著な成果はなかったとしても、あるいは自己満足の要素が存在したとしても、2年の歳月を自分の意志で、途上国のために生きたと過信することもある。

やはり常に考えることは、国際協力の難しさである。現地においては協力隊の在り方に悩み、帰国しては日本の世界に対する在り方に目を向けてはみるものの、確固とした解答が得られるはずもなく、堂々巡りになってしまう。ただ、今の私に出来ることは、これから協力隊に参加する人々に、私の2年の体験を屈折なく伝えることであろう。さらには、その2年に続く帰国後のカルチャーショックなる苦悩が、現地にいた時よりもさらに一回り自分の視野を広げてくれるということ。私は、この帰国後の苦悩を味わうために、2年間協力隊に参加する意義があると言っても決して過言ではないように思う。もちろん、今後もこの苦悩を繰り返してゆくことになるだろう。そして、いったい、世界に住む同じ人間のどこにどのような差があるというのかと。やっていることは結局は日本人もスリ・ランカ人も、あるいはどこでも大して変わらないではないかと。

井岡隊員の報告書を読んで

古松 弥生

スリ・ランカにおいて、大小の困難をのり越えて、積極的に協力活動を行なった様子が手にとるように分かり、大変感心している。

特に、任期2年間の後半の業績はすばらしい。要請国の現地の役所に働きかけて、インストラクターを集め、研修会を開くなどの創意工夫をしている。青年海外協力隊の名の示すように、要請に答えての協力活動の主体性はおのずと限界があり、なかなかこちらが思うようにはいかない。しかし、受身でいてはだめで、熱意と工夫により、この様な道も開かれるのである。

また、派遣された所に適合した良いカリキュラムを自主的に作り、計画的な協力活動を行なうことも必要である。与えられた条件をいたずらに批判するのみでなく、その条件の中でいかによりよく協力していくかの創意工夫が大切であることを、良く実証している。このような積極的な活動は、後続の隊員に対してはげましとなり、良き模範を示したものと見えよう。

しかし、この隊員も最初からうまくいったのではない。初任地における、設備はすばぬけて良いが、何となくかみ合わない活動の後、設備は悪くても、生徒に学ぶ姿勢がある転任地で、教える側も発奮させられた経験や、「技術を習得した者は他の訓練所の教師に採用する」という大臣の一言により、それまでと一変して意欲的になった例などは、学ぶ意欲を起こさせるものは何かについて考えさせられる。学ぶ意欲のない所に、教育の成果は期待出来ない。青年海外協力隊の活動にも、まず学ぶ意欲を起こさせることが先決であろう。

派遣された地域の条件や教わる側の個性により、意欲を起こさせる条件は異なるかも知れない。それでは、その条件を見ぬく力はどう養えばよいのだろうか。

私は、根底には、人間に対する愛が必要なのではないかと思う。人が必要としているものは何かを見きわめるには、相手を一生懸命観察することが必要である。そして、するどい観察の目は、相手を受する者に与えられるのではなからうか。

手芸の技術の伝達には、それ以前に、それを受入れるための良い人間関係の成立が必要である。そのためには、人柄の誠実さと共に、明るさ、楽天的な性格も必要かも知れない。

また、たとえ材料を購入する予算がなくても、設備が悪くても、対象の生徒の意欲が低くても、そこをなんとか工夫して、その条件の中で成果を上げ得る熱意と創造性のあることが望ましい。積極的で、少々のことにはへこたれない逞しい人が、青年海外協力隊には必要なのだと痛感した。

手芸の要請には、一つの技法を極めた人よりも幅広く多くの技法を学んだ人を求めるものが多いが、この報告書を読んでその意味がよく分かった。また、このような場合、専門技術の能力に加えて、人間的な能力・魅力が大いにものをいうのではないかと感じた。

この報告書は、単なる技術の伝達記録ではなく、人の心のあり方を教えてくれる、貴重な体験記である。

(協力隊技術専門委員)

稲作を中心とした農業訓練活動

第2, 3号報告書
職 種 稲作
氏 名 小野 浩
配 属 先 国家青年活動評議会

小野隊員の略歴

生年月日 昭和32年4月23日
出身地 千葉県
学 歴 東京農業大学卒
派遣期間 56年7月～58年7月

1. 不作のマハ作

現在、マハ作が終わり、ヤラ作を迎えようとしています。スリ・ランカは10月から3月に吹く北東モンスーン、5月から9月に吹く南西モンスーンと、中南部にそびえる山岳地帯の影響で、天候による年2回の稲作可能地域と、年1回の稲作可能地域に分けることができます。前者はコロomboを含む島の南西部、およそ4分の1を占める地域です。また、後者は残りのおよそ4分の3ということになります。10月から3月に吹く北東モンスーンは全島に降水をもたらし、この期間の稲作をマハ作と呼んでいます。5月から9月に吹く南西モンスーンは中南部にある山岳地帯の為、降水は主として南西部のみみられるので、南西部のみの稲作となり、この期間の稲作をヤラ作と呼んでいます。

前マハ作は降水不足の為、水田をはじめ他の農作物に甚大な被害を与え、この影響で200万人の人々が、現在辛酸をなめている状態です。また、これに伴いコレラの発生が見られ、私の任地周辺でも発生しています。当の本人は、この事を他の隊員から聞き、驚いています。知らなかったとは、まったくのお笑い草です。ですから、今、ヤラ作における全島民の期待は大きく、ヤラ作が前マハ作同様不作になれば、農民はまたオロオロ歩き、困窮者の数は増し、大きな社会問題になりかねません。来年、選挙を控え、現政権もさぞ苦しいことでしょう。しかし、雨の方はまったく降ってくれず、訓練生の居なくなった今、毎日の野菜の灌水が一苦勞です。

2. スリ・ランカはやっぱり住みやすい

スリ・ランカは、訓練中からパングラデシュ、ネパールをはじめアフリカ派遣の隊員から羨望の的で見られていましたし、スリ・ランカへの絶賛の類も聞きました。実際諸々の平均的な数値は、他の任国に比べ、“良”というものでしょうが、この数字が曲者で、富める者が富み、病む者が一層病むということが現実だと思います。第3世界などと勝手に呼ばれている国の持つ問題は、スリ・ランカにもある訳で、本質的にはどこの国も同じだと思っていました。しかし、現在、昨年8月に来て、はや6カ月を過ぎた訳ですが、羨望に値する国だと思っています。

海洋性気候ですから、大陸性気候と比べれば、それは格別のものです。そ

れに現政権の自由化政策のおかげで、金が大きな顔をして歩き廻っていますから、消費文化で暮らしていた私にとって、物質面におけるカルチャーショックは少ないです。前政権の特定品目の配給制に比べれば、在留邦人にとっては、まったく有りがたいものだそうです。当然、物価はあがっています。しかし、実際私自身肌で、こちらの人々の物価高による不平不満は聞きません、感じません、見えません。これは私の不徳のいたすところかもしれませんが、それはシンハラ（私の居る地域は全てシンハラです。タミールは北部を中心に集中しています）今の不幸は前世の因果で、来世を期待しようという小乗仏教の思想と関係しているのではと思う訳です。

3. 第1回目訓練

まず、前回の訓練が稲作期間に合わせたものでしたから、耕起から稲刈り、脱穀まで一貫した作業を行う事が出来たこと、集中的に人手の必要な田植え前と稲刈り・脱穀を除く期間に、野菜が出来たことは、1回目としては中々充実したものであったと考えられます。午後の講義も、稲作は、①伝播・歴史 ②形態 ③栽培 ④病虫害 を要点に、舌足らずの面もありましたが一通り消化することは出来ました。野菜に関しては、稲作の講義、他の講義（英語の講義、農務局からの野菜の講義、国連ボランティアの養鶏の講義等）の穴埋め程度のもので、到底体系的には出来ませんでした。各野菜作付け前の簡単な説明を加えました。これも農務局の講義と意見が違い、訓練生を迷わしてしまいました。

それでは、稲作訓練の問題点・反省点とその対策を、稲作作業の順を追ってあげてゆきます。

前回の報告書では、道具は揃っていて支障なしと書きましたが、それは2グループ（水稻と養鶏）に分け、5～6人の訓練生に対して揃っているというだけで、やはり5～6人の訓練生だけで耕起をやっているのは、大変時間がかかります。悪いことに、前年稲を育てたのか、雑草を育てたのかわからないような田んぼで、てこずりました。また、ジャバンパーソーと呼ばれるサンショウモが水田一面に浮いており、この除去作業にもてこずりました。サンショウモの繁茂が稲の生育にとってマイナスになるからというだけでなく、水田に稲作以外のものがあると具合が悪いようです。高温障害を考えた場合、これらの浮草が水温や地温を下げるのに大きく役立つと思うのですが。

稲作を中心とした農業訓練活動

幸いにも前回は、高温障害は出ませんでした。5～6人で耕起をやってましたから、耕起が想像以上に遅れ、後の作業に大きな影響を与えたのは事実です。今のタワの数は以前の倍に増えましたので、次回は全員総出で田植えまでもってゆくようにしなくてはなりません。養鶏担当の国連ボランティアには、それまで辛抱してもらわねばなりません。



水田の除草作業

赴任時から水田は2エーカー（約8反）と開かされていました。8反の田んぼは私にとって見当がつかませでしたので、水田を見て2エーカーか否か残念ながらわかりませんでした。今までの日本の1反、2反の田んぼを頭に入れて、倍、倍にして計算していたら、決して2エーカーなどないとわかったのでしょうか。田植え後の簡便な実測により、2エーカーどころか、1.1エーカー（4.6反）であることがわかり、ガッカリしました。2エーカーというのは、池や隣接する水田として利用しない土地を含む広さだったのです。これにはスタッフもびっくりしていました。稲量を反当り2.5kg（2エーカーとっていましたから20kg）が必要で、苗代は㎡当り50gで播きたいと言えばよかったものを、スタッフから約2ブッシュルの籾を、ハイそうですかともらう羽目になってしまったのです。一体2ブッシュルが何kgなのかわからないのです。ブッシュルは容量の単位ですから、全て言葉の足りなさが原因です。1ブッシュルは約20kgですから40kg近くの種籾だった訳です。結局2倍量の籾を使用して苗代をつくり、これでは厚まきになるし、苗は余るし、悪

いことは重なるもので耕起・レベル取りに前述したとおり時間がかかり、苗代期間は25日から30日と長くなるし、散々なものとなりました。レベル取りも天水田で直播きをやっているのですから、しっかり取れているものと思っ
ていましたが、これもひどいものでいいかげんのところで妥協しなくてはな
りませんでした。こんなすったもんだで、健苗育成どころの話ではありませ
ん。午後の講義で健苗のことばかり強調していたのですから、全く赤面して
しまいます。しかし、もう計りのありか、水田は1.1エーカー、1ブッシュ
ルが20kgってことがわかりましたから、次回はこんな失敗、絶対しません。

田植えは、乱雑植え、12in.×6in.、10in.×10in.、10in.×6in.等の栽植方
法でやり、施肥、元肥(1.1:3.3:3.3, kg/反のN, P, Kの各成分量。
以下同じ)と2回の追肥(①-3.4:0:0 ②-3.8:0:1.8)の一括としま
した。薬剤散布はメイチュウ防除の為に、苗代期、本田中期にそれぞれ散
布、カメムシ防除の為に、出穂後1回散布しました。尚、生育調査を3つ
の水田から5~6本選んで5日毎に行いました。結果は以下の通りです。

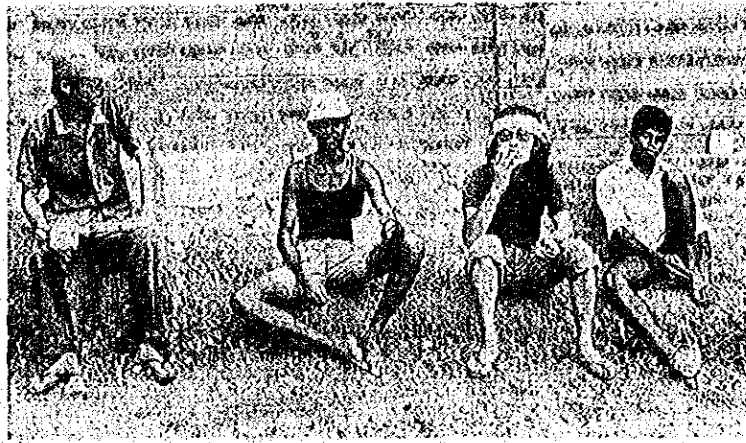
	10in.×10in.	乱雑植え	10in.×6in.
穂数/m ²	126本	164本	183本
総粒数/穂	109粒	108粒	93粒
登熟歩合	0.85	0.86	0.85
株数/m ²	15本	20本	27本
有効茎歩合	75%	82%	83%

植え付け本数は2~3本で、籾千粒重は平均28.4gでした。生育調査の結
果、m²当りの穂数がとれなかったこと、1穂粒数が少なかったことがわかり
ます。これらは田植えの遅れで、田植えから幼穂形成期まで(栄養生長期)
が短かったことが原因で、生育初期に基数が充分確保できませんでした。
ですから、苗代期間を15~20日程にして早植えし栄養生長期を延ばせば、穂
数の増加が期待できると思います。また、1穂粒数が少なかったのは、追肥
時期に問題があると思われます。ですから、特に2回目の追肥を籾の退化を
防ぐために減量分裂期に施すことによって、効果があらわれると思います。

稲作を中心とした農業訓練活動

1回目追肥は、穂数確保のため分蘖肥^{ぶんびつ}として施そうと思います。この追肥時期に関しても、スタッフともめにもめ、言葉の足りなさに説明不足が目立ち、私の意見を理解してもらえなかったことが残念です。10年の経験を持つと自称する1人のスタッフにうまく説明出来るようになれば、私も立派なものです。

稲刈り・脱穀は、こちらの一般的なやり方で行いました。稲刈りは日本のように地際から刈り取るのではなく、株のオからオを残して刈り取ります。有機物を施用しませんから、根部と合わせ充分とはいかなくても、供給される訳です。また短かく刈った稲は、脱穀場に運ぶのに非常に便利でもあります。脱穀はインド型稲は脱粒性が高いですから、牛や水牛に踏ませて脱穀します。農場ではトラクターで脱穀します。トラクターで稲の上を走りまわるといふ訳です。機械ですから早いことは早いのですが、砕け米が牛や水牛で行うときより多く出ます。また稲刈り時に乱暴に稲株を取り扱っていると籾は脱粒し、刈り取り後脱穀場に運ぶ際も稲穂がボロボロと落ち、脱穀場での砕け米以外の籾の損失と、相当の量もったいない結果になっています。あまりひどい田んぼは皆で落穂拾いをしました。落穂拾いは全部の田んぼにおいて行いたいものです。



同僚の隊員とひと息つく筆者（左端）

4. 第2回目訓練

2回目の農業訓練はヤラ作に合わせ、4月から4カ月間の予定で行います。今回も稲作期間にあわせた訓練期間ですので、稲作は一貫して出来ま
す。実利的にも、最初から最後までやった方が農場側には得なのです。労働
者の日当は高いのですから、前は野菜が出来たとっても300㎡程のもの
でしたから、途中かなり手持ちぶさたになりました。3月中に500㎡程の畑
をコナツ林の中に開墾しましたので、暇無しの状態を保ちたいと思っ
ています。野菜は家庭菜園程度のものでなく、どんどん大きくしたいと思っ
ています。コナツ林はいやという程ありますから。

稲作は今回作付け期間が短かく、3カ月半品種を使用しますので、播種期
は充分留意なくはいけません。ここでつまずくと大変です。早植えさえ
出来れば大丈夫でしょう。今回は前回やらなかった肥料試験、特に処理に困
っている鶏フンを使用して、金肥代節約を試みたいと思います。訓練生主体
とはわかっていますが、やはり農場の赤字減らしに少しでも貢献したいと考
えています。また、前回同様、各人毎に田畑をそれぞれまかせて管理を自分
の責任でやってもらおうと考えています。

前回の訓練生に接して感じましたが、やはり農業はしんどい生業で、出来
ることなら別の仕事をやりたいというのが、彼らの本音のようです。それに
自由化の進むなかで、若者の都市願望はつのるばかりです。そんななかで、
酒・色の資にありつくだけの都市の持つ醜さや恐さを説いても、彼らを説得
するまでいきません。なぜなら、口耳の学をわずかに修めたばかりの私自身、
充分都市というものからいい目をみているのですから。しかし、話をしてい
て、都市で金を貯めてそれから農業をやるよという奴も居るのです。ここで
も土地を広くしたり小作地を手に入れるのに、莫大な金が必要な訳です。何
も生み出さない寄生地主が存在し、小さな芽を摘んでゆく訳です。農家生活
がどのように価値評価されているかも、だいたい見当もつくというものです。
そういう状況ですから、説得力のない軽佻な私の意見など感情論で終わって
しまうのです。しかし、訴らずにいられません。これは2回目以降の訓練に
も語っていこうと思う目標です。

5. 訓練をふり返って

稲作を中心とした農業訓練活動

2回目農業訓練(1982年4月～8月)、3回目農業訓練(1982年9月～1983年3月)を経て(後述)、現在4回目農業訓練を4月から始めているはずなのですが、雨季の絶望的な遅れにあい、今回の農業訓練を見合わせました。世間でワイワイ大騒ぎしているかと思うとそうでもなく、新聞等でも大層な記事も載っていないようです。この時期はヤラ作で、島南西部およそ4分の1の地域のみで作付けとなりますが、マハ作と比べ気象が非常に不安定です。絶対条件といえる水が不安定といえるこのヤラ作では、作付け期間も短かく、各農家もマハ作と比べ力を入れていないように思われます。そんな訳で、無理してやらんで今回はやめどころ、という事のようにです。ヘタに遅く作付けを始めて、肝心要のマハ作にずれ込みでもしたら大変ですから。それでも自分の田んぼを持っている農家は、しっかり少ない水を貯めておいて作付けをしています。

2回目農業訓練は税所隊員が抜け、国連ボランティアのJOSE(彼も1983年1月で帰国してしまいました)と2人で担当したのですが、このヤラ作は各地で洪水の被害が出る程、雨ばかりの日が田植え後(1982年5月中旬)続きました。この作付けでも雨季のはじまりが遅れ、農場スタッフの全面直播き論と私の田植え強行論がぶつかり、結局半分田植え、半分直播きという変てこな案で妥協しました。雨季がはじまるやいなや連日の雨・曇天続きで稲の生育が悪く、特に田穂して花を開いてから(1982年6月下旬)が致命的でした。イモチの発生、カメムシの被害にあい、収穫は皆無に近い状態でした。あんなひどい田んぼは私の今までの経験(通算7作目)ではじめてです。出穂してもまったく穂が垂れず立ったままです。まったく無残な姿をさらけ出した作付けでした。生育調査もやらず、毎日憂うつな日々を送っていました。

畑の方が並の作付けならまだ気安めにもなるものの、手広く開墾して作付した期もまったく駄目。ガンノルワ(キャンディの近く)の中央農業研究所にこの土壌検査を依頼したところ、土壌pH“極強酸性”(4.3)、土壌全N含量“ややかく”(0.142%)という状態、他に土壌置換性カリ・カルシウム・マグネシウムも“やや欠く”状態(それぞれ0.12 me/100g, 0.09 me/100g, 0.04 me/100g)、ということが解り、なる程、と実験科学の威力に感心します。しかし、このような分析結果が解ろうが、解るまいが、農家のやることは同じで、実験科学の無力にも気付きます。



野菜の播種を指導する筆者

この配属先には、農業訓練をはじめ職業訓練色の強い訓練もあり、幅広く青少年活動を行っています。しかし、農業訓練を他の訓練と同列・同次元で扱っている気配を強く感じます。だいたいこの“農業訓練”という言葉自体、的はずれで奇妙な訳です。何か別の言葉を捜さねばなりません。別に農業の特殊性を前面に押し出せ／とか、農家の子弟の根性作りだ／とか言いません。ただ農業が根っ子のところで決定的な位置を占めてることを理解して欲しいものです。世界45億の人が全て農家でっても何ら問題はありませんが、45億の人が全て溶接工だったら、これは大問題になります（溶接が出てきたのは、親しい人が溶接隊員だからで何ら意味はありません）。世界共通に一般化している、たとえば商工業優先が幸せをもたらすという価値観への疑問を提示したいものです。今年2月に農場内に移動してきて、ようやく言ってることと、やってることが重なり合ったようです。

6. 第3回目訓練

3回目農業訓練は、1982年9月15日から始めました。落ち込んだ気分も雨季が順調に始まり、気分一新です。毎回女子の割合が高く、耕起2回を全訓練生でやるのは非常に負担があります。せっかく雨季が順調に始まっても耕起が遅々と進みませんと、雨季が遅れたことと結局同じことです。今回は近くの農家に2頭立て牛耕3基で、2回の耕起、畦ぬり、切平を請け負っても

稲作を中心とした農業訓練活動

らい、全面田植え、1回目作付け（マハ作）の収量を上回るべく作付けしましたが、約1割減の収量となり（概換算で約280 kg/反）、期待はずれの結果となりました。1回目作付けと3回目作付けの大きな違いは、乱雑植え面積の差が考えられます。1回目作付けでの乱雑植え面積は全体の74%、3回目作付けでのそれは28%です。

『熱帯の稲作』（農林統計協会）によると「乱雑植えでは㎡当り20株くらいまで栽植できるが、それ以上の密植になると乱雑植えではむづかしく、正しい間隔で移植することが必要である」と書いてありますが、これはウツで20株どころではない40~50株くらい栽植されています。いずれの水田にどんな植え方をしても、1株茎数の差はさほど無く、収量の増減は㎡当りに何株植えたかによって決定される傾向にあります。㎡当り沢山植えれば、茎数ごとれ、穂数が確保出来ますから。もちろん詳しく見てゆけば他の要因も深くかかわってくるのですが、主要因は㎡当りの穂数の差から来るようです。㎡当りの穂数を確保すべく、栽植密度の増加の為にライン植えをやったつもりが、反対に減らす結果となり、減収の大きな原因となった模様です。

一方、小規模で、日本でも見られる尺角一本植えに近いものを試作しています。楽な苗取り・田植えを行い、疎植に植えられた稲の力を充分引き出し、米をとろうというものです。30cm×30cmの1本植えというのは、㎡当りたったの11株です。籾の量は格段少なくすむ、苗取りは簡単、1本ずつ植えますから田植えは非常に楽です。田植えを経験された方は、充分理解できると思います。スリ・ランカでの田植え労賃は非常に高い状態です。付近では、3回の食事、2回のお茶付きで25ルピー（政府買い上げ価格が20kgおよそ60ルピー）ですから、簡単には直播きから手植えに移りません。途中で数段階経る必要があります。こちらでは30cm×30cmの間隔の2~3本植えを試作しています。確かに平均1株穂数は多いものの、㎡当り11株ですから乱雑植えと比べたら相当差が有ります。㎡当り穂数となると低位になります。疎植ですから、収量を構成する四つの内の一つである平均1穂籾数を期待したのですが、これも並という結果を得ました。

こちらの田んぼでは、余剰の鶏糞を施用しつつありますが、今の段階では乱雑植えが一番良好な収量を得ます。しかし、乱雑植えは字の如くメチャクチャに植えておりますから、生育中期の管理は大変です。追肥・薬剤散布・草取りは困難です。足の踏み場がないのです。ですから、およそ3週間隔

(これは体のサイズに合わせます) に管理溝をつくり、管理しやすいよう変則乱雑植えを実施しています。この管理溝が有るおかげで、俄然、生育中期の管理能率があがっています。これは直播きにも使用できます。出芽後補植をするのですが、補植用苗を管理溝にあたる部分から苗取りして、播きむらを直します。生育中期の管理が良好なら収量も期待できます。

化学製品を投入して好収量を試みたり、出る金を抑え楽な作業で並の収量を試みたり、安定した米作りを目指している訳ですが、最近入手した情報によると、現在進行中でかつ完成其近のマハヴェリ河開発の見通しでは、米はゆりに自給率を越え、大幅な余剰米を出してしまう餓渇が強く、転作品目の検討中だということです。米をどのように扱うのか私の予想の外の事です。願わくは農家存続の危機に陥らぬよう考えて欲しいものです。

この農業訓練を、他の職業訓練性の強い訓練と異なる内容を持たせるために、畜産部門と耕種部門の有機的つながりを強化させる一方、農業教育たらしめるために、今回から始めたのはブンチ・パンダ氏——農業経済学者——によるセミナーです。訓練生になる子供の傾向として、彼ら自身と自国とのかかわりあい、世界とのかかわりあいを知らずにいることが多いと感じました。ブンチ・パンダ氏に月2回何でもいいから話して欲しいと依頼しました。「なんで他人に頼むんだ。オマエ本人が語らんのか」という批判もありました。これは、もし私がスリ・ランカ人並にシンハラ語をしゃべることができて、ブンチ・パンダ氏と同じ事を語ったとしても、彼らは絶対私でなく、ブンチ・パンダ氏を信用するはずで、これは私の誠意が足らんとかいう問題ではなく、第3世界の人々はこういう傾向に進んでいるのではないかと感じるからです。理屈ではない、ですからブンチ・パンダ氏を味方にしなければならぬのが現実ではないでしょうか。ブンチ・パンダ氏も大学生相手と違い大いに困惑したようです。経済、統計中心の講義になってしまい、子供達の方も大いに困惑したようです。まだブンチ・パンダ氏と内容を煮つめなくてははいけません。平たく、各論でなく総論を語ってもらうようにしなければなりません。ゆくゆくは、ブンチ・パンダ氏を田植えや稲刈りに引きずり込まなくてははいけません。

話が前後してしまいましたが、今回脱穀機を購入しました。IRRI考案というこの機械、最初不良品をつかまされ、脱穀・調整が慣行より手間どり大失敗しました。こちらでは脱穀・調整の段階で損失する穀は、田んぼから

稲作を中心とした農業訓練活動

運んでくるときに損失する籾同様見逃すことができません。脱穀場に運ぶ際、飼料袋を利用して籾の脱粒を防ぎ、落穂拾いを徹底しなくてはなりません。そして今回、隊員支援経費というありがたい制度のおかげでこの機械を購入できました。不良品をつかまされたものの、改良新機種と交換してくれましたし、アフター・ケアも確かなようです。とにかく灯油で動くエンジンに感動しました。今までエンジンは軽油かガソリンでしか動かんと思ってましたから。対策2弾として、土面である脱穀場にシートを広げて脱穀・調整を行いました。農場側は「高いんだゾ、破けたらどうするんだ」という声でしたので、おもいぎってコンクリで固めようと考えています。

7. 稲作実習の農作業

3回の農業訓練を経て、すなわち3回の作付けを経験した訳ですが、今後スリ・ランカに農業隊員が増加するであろうという観測のもとに、稲作実習の畜力及び人力（訓練生、以後実習生）による農作業（単位当り所要労働）一覧を3回の経験と観察から載せます。この一覧は私の農場（ウット・ゾーン、コロomboの北東12km）でのものですので、地域性が強く、普遍性はありませんので、その点留意して作業暦作成の一助として欲しいものです。

訓練はマハ作に合わせたもの（9月～翌年2月）、ヤラ作に合わせたもの（4月～7月）と2種類、中1カ月の準備期間を置いて行っています。マハ作訓練が6カ月間、およそ120日前後の実習日数、ヤラ作訓練が4カ月、およそ90日前後の実習日数です。内容は稲作・畑作・養鶏を主体に他は養蜂です。稲作・畑作の実習・講義を私が担当しますが、養鶏（畜産）担当が現在不在、養蜂は農場外の人に来て集中講義を行い、最後にブンチ・バンダ氏のゼミとなります。

原則として午前中を3時間の実習、午後を3時間の講義にあてていますが農繁期のときは午後も実習となります。『スリ・ランカの農業』（社団法人・国際農林業協力協会）を参考にし、稲作実習の作業内容を以下のとおり分けます。

- (1) 実習生（15人、以下同じ）のクワによる耕起（2回）
- (2) 水牛2頭立て犁三つによる耕起（2回）
- (3) 水牛2頭立て犁一つによる均平
- (4) 実習生による散播

- (5) 実習生による苗取り・田植え
- (6) 実習生による草取り
- (7) 実習生による元肥・追肥施用(4回)
- (8) 実習生の肩かけ1ガロン用散布機2台による薬剤散布(3回)
- (9) 実習生による稲刈り及び脱穀場までの運搬
- (10) トラクターによる脱穀・実習生による稲わら除去・籾集め・風選・袋詰
- (11) 脱穀機による脱穀・実習生による稲わら除去・籾集め・風選・袋詰
- (12) その他(クロ塗り, パーソー取り, 補植, アゼ修理, 水路掃除, 鶏フン施用, 生育調査)

それでは、それぞれの“1反当り所要時間”と“1日当り作業面積”を算出、コメントを入れてゆきます。尚、“1日当り作業面積”は、田植え・稲刈り・脱穀・調整は1日6時間、その他は1日3時間ということで算出しています。

(1) 実習生のクワによる耕起(2回)

1反当り所要時間 : 4.9時間

1日当り作業面積 : 613.3㎡

耕起は通常2回行います。中1週間置いて2回目耕起を行うと理想的です。1回目の耕起では水がある程度無いといけません。これは日本でも同じです。クワを一撃加え、水が一撃をくらった隙間へ流れ込み反転を楽にします。反転しそなった土塊が元に戻りそうになりますが、そこをすばやく右足でおさえ、天地返しをします。この作業、全て実習生次第です。休みをうまく入れ、笑顔を絶やさず、話をとぎらせないように、歌なんかうたったりすると、より効果的に作業は進みます。黙々とやるのはよくない、楽しくなくてははいけません。こうやって1回目耕起を終了し、水を張って1週間待ちます。何故1週間待つのか、この辺のところは疑問ですが、短かすぎるのは良くないようです。この間、水路掃除、パーソー(サノショウモ)取り、畑作、また苗代をつくると、これも理想的ですが、何が作業を遅らせて3週間苗が老苗になるかわかりませんから、3週間の見通しが確実につくまで種播きは慎重にしなければいけません。そして、2回目耕起にかかります。2回目はより柔軟になっていますから耕起は楽ですが、大雑把な均平をとり、より確実に雑草除去する為に、足で表面に現われている雑草を押し込みます。ですから、ほぼ同じ所要労働となります。

稲作を中心とした農業訓練活動

クロ塗りは実習生には中々むずかしく、女の子には無理です。男手の少ない時は助けが必要となります。クロ塗りは年2作のうち、マハ作のときだけやるそうですが、毎回やりたいものです。

(2) 水牛2頭立て犁三つによる耕起(2回)

1反当り所要時間 : 0.9時間

1日当り作業面積 : 3450㎡

これは早い、まったく耕起の労働から解放されます。こちらではインド犁はまだ見ません、反転犁をよく見ます。右側にゆくときは「マッーマッー」、左側は「ラッーラッー」と叫びながら、人牛一体となって耕起します。片手に犁の柄、片手に60cmの棒を持ち、ピンピン叩きます。グイ、グイ棒を立てます。私がやると、こういう棒術は弱気になって掛け声だけに終始します。2番目か3番目に位置して耕起しますが、どうもうまくいきません。列から離れたり、突然止まったり、ですから長時間やりません。素直に持ち主に主導権を譲り、牛耕のしやすいように蔓性の植物・茎の固い植物除去、そして水の出し入れに専念します。これが一番早く作業が進みます。

耕土が浅く、構造的に反転しにくいものの、耕起に費やす労働の節約は文句なく、牛から得る余剰物とを考え合わせ、プラス・マイナス、プラスになります。

(3) 水牛2頭立て犁一つによる均平

1反当り所要時間 : 0.7時間

1日当り作業面積 : 4600㎡

これも早く、ドンドン土を移動してゆきます。幅2m、高さ50cm程の板に取っ手をつけて、牛に引かせます。板の角度の調節で土量を調節します。

これを人間だけでやると大変です。ピンロウ樹を切り倒し、5m内外の長さに切り、両端にロープをかける為のクイをうちます。ロープを取り付け、数名の実習生でこれを引っぱって均平作業を行います。高低差の少ない田んぼですと、数回行ったり来たりすれば終わります。しかし、こういうのは少なく、大体同じ数の実習生がこの5mのピンロウ樹に両手をそえ、よつんばいになって重しをかけ押します。これは重労働です。左右の実習生の引きがうまく合わないと、ピンロウ樹が斜めになり仕事になりませんし、よつんばいになっている実習生の重しが重すぎて、うんともすんとも動かない時もあります。しんどい作業です。歌など1回もうたいません。

(4) 実習生による散播

1反当り所要時間 : 4.6時間 (1.6時間)

1日当り作業面積 : 650㎡ (1900㎡)

これは熟練した農家(カッコの数字)と比べたらかわいそうです。

(5) 実習生による苗取り・田植え

1反当り所要時間 : 10.4時間(1回目) 8.2時間(3回目)

1日当り作業面積 : 575㎡(1回目) 730㎡(3回目)

この差は乱雑植への植え付け割合のせいかな、それとも私の3回目を迎えた手慣れが良くなったのか判断しかねます。

(6) 実習生による草取り

総時間 : 33時間前後

これは田植え後、畑作に重点を置きはじめてしまうので、こういう結果となります。もう少し時間をかけて草取りをしたいと思います。3回の作付けでヒエ類等が格段減ってきましたが、4回目の作付け無しで元に戻ったか心配です。

(7) 実習生による元肥・追肥施用(4回)

1反当り所要時間 : 0.7時間

1日当り作業面積 : 4600㎡

各実習生の担当する田んぼへそれぞれふります。追肥の時期は農務局奨励通りです。とにかく雨の心配をしながらふらねばなりません。ふったその晩に大雨にでもあうと、まったく肥効は期待できません。今は二つのバケツを用意し、ハカリで私がそれぞれの肥料を計量して、各実習生がふります。午前中でしっかりふり終わります。1回目など同じ量を3日もかかったのですから、勝手に解ってきました。

V₁という混合肥料(N, P, K成分:0.65, 7.14, 2.32)を元肥として、田植え直前に100kg(21.5kg/反)表層施肥します。1回目追肥を田植え後2週間目に、尿素(N成分:3.39)を35kg(7.53kg/反)ふります。2回目追肥を田植え後4週間目に、同じく尿素を35kgふります。そして3回目追肥を田植え後8週間目の出穂前に、T, D, M. という混合肥料(NK成分:3.2, 2.15)を50kg(10.76kg/反)ふります。

4回の元肥・追肥で全N, P, K成分は10.63, 7.14, 4.47となります。出穂後にもう1回ふりたいものです。全体量を同じにして、穂肥として尿素

稲作を中心とした農業訓練活動

をふってみようと思います。

(8) 実習生の肩かけ1ガロン用散布機2台による薬剤散布(3回)

1反当り所要時間 : 1.6時間

1日当り作業面積 : 1840㎡

苗代時期に1回、生育中期に1回、出穂後に1回ぐらいまきます。イネタテハマキ、イネツトムシ、ニカメイチュウ、ウンカ、カメムシが見られます。2回目作付けでは、イモチとカメムシでひどい被害となりましたが、どれも散発的といえます。

(9) 実習生による稲刈り及び脱穀場までの運搬

1反当り所要時間 : 3.9時間

1日当り作業面積 : 1533㎡

稲刈りは援農がありますから人数は倍ぐらいいなり、1日で終わります。この日にそなえて各田んぼの水は全て開けてありますが、水は完全にはぬけません。刈り取った稲はその場に置き乾燥させますから、一部はどうしてもぬれます。そして、ぬれた稲が脱穀場で山積みされる訳ですが、今回のように脱穀が調子良くいかなかったり、前々回(2回目作付け)のように、脱穀・調整の時期に長雨にあたりすると、山積みされた稲が熱をもちはじめます。当然米の品質は著しく低下します。脱穀が遅々と進まないうゑ、朝起きて稲山から湯気が出ているのを見ると、イライラしてきます。

田んぼから稲を運び出すには、飼料袋と太いロープを利用して大層大きな稲束をつくります。2人で両側からグイッと締めて結びますから詰まっています。ひと抱え以上あります。これを2人がかりで持ち上げ、運び人の頭の上に載せます。ところが私の運ぶ量より、女子の運ぶ量の方が多いのです。同量以上運ぼうとすると、バランスがとれず、前も見えず往生します。経験を積まないといけません。

(10) トラクターによる脱穀・実習生による稲わら除去・糞集め・風選・袋詰

1反当り所要時間 : 5.2時間

1日当り作業面積 : 1150㎡

脱穀場中央部に、新たに直径5m程に稲を山積みして、トラクターで山積みされた稲山を周辺部から、グルグルまわりながらくずし、踏み、脱穀させる、という大雑把なことをします。尚、田んぼから運んできた稲は脱穀場周辺部にきれいに積みます。脱穀する為に積まれる稲と違い、キチンと積みます。

大分脱穀が確認されると、今度は人海戦術です。3段階ぐらいに分けて、籾とワラを分けてゆきます。160cmと30cmの部分からなるL字型の棒で、ワラをかき上げ、大雑把に籾と籾ワラを分けます。その後、素手でやはりワラクズ等をかき上げ、籾とワラクズを分けてゆきます。そして、仕上げに人力の風車で風選をします。この風車まわしが大変です。5分間まわし続けるのは容易なことではありません。男手が少ないので、すぐ番がまわってきます。

大変大雑把ですから碎け米が多く、籾が土面にも相当埋没してしまいます。籾の損失量は考えなくてはいけません。籾の損失量は牛で行っても同様でしょう、土面の上では。

(11) 脱穀機による脱穀・実習生による籾わら除去・籾集め・風選・袋詰

(1人のレーバーを加える)

1反当り所要時間 : 2.9時間

1日当り作業面積 : 2069㎡

これはカタログからの希望的観測ですので、今作付けからはなんとも言えません。

(12) その他(クロ塗り、パーン取り、補植、アゼ修理、水路掃除、鶏フン施用、生育調査)

コメントなし。

8. 最後に

ぼちぼち、田植えの援農の願い、ヒナ購入、野菜の苗購入を希望する元実習生が現われています。しかし、現実には色々なこちらの不備の為対処出来にくい状態です。以後も受け入れる実習生は全てこの条件(歩いて来れる範囲)を満たす青少年であることを頼み、こういう芽をつぶさず側面的協力を続けたいと思います。それには、こちらの農家にとって理想的な農業訓練を実施していく為、人材・設備を整えてゆかねばなりません。現在の訓練内容は稲作を主体にやっています。畑の方も堆肥施用、石拾い等を中心、畑らしくなってきました。しかし畜産部門が不在で、片肺飛行です。畜産担当者が居れば今回のような稲作不可能な時でも、訓練を中止する必要はない訳です。

理想的な畜産農業を実現する為には、共鳴してくれる畜産担当者が必要です。

帰国して思うこと

小野 浩

はや帰国して半年が過ぎた。およそ2年振りの、そして初めての駒ヶ根の寒さに震えながら、汗腺が開きっぱなしだった頃を思い出す。

1983年8月にスリ・ランカに赴任して、9月から、NYSC, Heiyantud-uwa farmでの2年間を、どのように私の人生に位置づけるか。良い事ばかりあったわけでもないし、突然の帰国で協力隊やNYSC、そして後任隊員には大いに迷惑をかけてしまったのが辛いけれど、やはり20代の大きな節目となった。

首をかしげるような、そして失笑を呼ぶような文章が散在する報告書を読み返してみると、ボツボツと思い出してくる。駐在員と大使館技術協力担当官との3人の雑談の中で、なに気なく出たコイア・ダスト（ココナツ殻から繊維を取った残りのズイとコルク）を使った土壌保全・土壌改良の話が、アッという間に具体化した事。皆で、NYSC商標入り野菜の、在スリ・ランカ東北アジア人向けの販売を話し合った事など思い出す。結局、どれも実現に関与せず帰国したのが残念だった。

それと、播種直後、田植え直後のスコールの中を畦切りしに走った事。生育中期の、一瞬にして昼間のような明るさになる大スコールの中で、ヤケッパチで修理不可能な畦を直している時、手を貸してくれた若いキリスト教徒の農場スタッフの奴も懐かしい。

また、1982年10月の大統領選挙真っ只中の、野党演説会場での日本批判に対して、即席のナショナリストに化してその場を引き上げた事も思い出す。

私のカウンターパートだったセネヴィラトナ氏の、日本研修が終わりに近づいてきた。自分の忙しさにカコつけて、研修員を送りっぱなしにしている。きっと、長年現場を積み重ねてきた彼のことから、素晴らしい日本人を見つけていることだろう。スリ・ランカの歴史の上ではアッという間の、点以下でしかない私の2年間の任期に比べれば、彼のこれからのスリ・ランカでの人生は長大だ。彼が、スリ・ランカJOCVに寄与する諸々の事柄を期待して止まない。私は彼のこれからの動向を、どこからでも見ていきたい

と思う。

10数年前からの、何か掴み所のない目標がだんだん具体化していき、そして走り出した。今、一息ついて考えているところだ。そして、やはりまた走り出していく事を再確認している。これから必要な部分を発見し、指摘を受けるのに、この1年間は有難たい。あとは自分次第だ。

自分次第だとシビアに考えてはいても、容易な方法を捜してしまう自分に気付く。まだ甘い。

小野隊員の報告書を読んで

御子柴 晴夫

筆者の読んだ報告書は、スリ・ランカのコロンボに近い湿潤地帯の農業訓練センターで、直接、農村青年の訓練に当たられた報告書である。

スリ・ランカは、インド半島の先端に近い南東方に位置する島国で、北緯6°N～10°Nの間の赤道に近い熱帯に位置する。その面積は65,610km²(日本の九州と四国を合わせたくらい)の小国であり、四方を海に恵まれ、海洋性気候下であり、年中温度変化の少ない温暖な国である。島は季節風の関係から、多雨地帯(約3/4)と乾燥地帯(約1/4)に2分されている。

報告者の任地は、コロンボに近い多雨地帯に属し、古くからの稲作地帯の真ん中であつたように思う。

スリ・ランカ住民の起源は明らかではないが、現在のヴェダ族の祖先であろうとされている。ヴェダ族は狩猟採集段階にある、かなり原始的な集団で、インド半島内部の山地未開人と同類であろうとされ、現在の人口は約6,000人といわれ、シンハリ族の中に吸収され独自性を失っている。

現在のスリ・ランカ人は2大人口集団で構成され、その一つはアーリアン系のシンハリ族で、いつからスリ・ランカに移り住んだかは明らかではないが、スリ・ランカの多雨地帯に住み、古くから稲作を生業とする民族のようである。

他の一つはドラビタ系のタミール族であろう。タミール族はヨーロッパ人によるエステート農業の発達にともない、エステートの雇用労働者として雇われて移住した民族のようである。現在は、どちらかというスリ・ランカの半を占める乾燥地帯に住み、厳しい生活条件の中で生業を続けている。

もっとも、筆者が10数年前に、日本国内で実施した稲作研究の集団コースに参加した人々の中に、両民族の方々が居られたが、日本国内であつたためか、その間にそれ程の区別は見られなかった。

スリ・ランカでは、多雨地帯でシンハリ族によって稲作を主作とした農業が営まれていたが、西暦1600年代にヨーロッパ人に目をつけられ、肉桂の採

集が始められ、次第に肉桂のエステートが発達し、つづいて、コショウ、コーヒー等のエステートが発達し、ココナツ園も増加した。そのため稲作地帯は減少し、商品作物のエステートとなり、多雨地帯の中央高地は茶園と化した。

その過程で、シンハリ族は稲作を守り賃金労働を好まない傾向があったために、エステート経営者は安い労働力源として、インドからタミール人を多数雇用した。そのようなことから、両民族は今でもその生活様式を異にしているという。

スリ・ランカの全農耕地はおよそ 170万haといわれているが、その内、茶、ゴム、ココナツの3大商品作物で50%を占めている。一方、水稻は古くからの最も基本的な自給食糧作物であり、全島いたる所で栽培されているが、多雨地帯に多く栽培され、エステートの発達と共に面積の減少を余儀なくされ、稲作農民の自給のみが引き続き栽培されたため、品種、栽培法の改良は進まず、米の輸入が増大した。

戦後、稲の生産が叫ばれるようになってから今日まで、栽培面積の拡大、化学肥料の増投、種子の改良、栽培法の改善がなされて、生産量の増大を進めているが、稲はスリ・ランカの古い住民作物で、その栽培は古くからの経験に基づいて引き継がれており、その改善は一日には進まず、現在の米の輸入額はスリ・ランカ全体の輸入額の最も大きな部分(約10%)を占めている。したがって、スリ・ランカとして米の増産に力を注いでいる。

かような状況下での、青年海外協力隊の方々による稲作改善のための訓練は重要な意義をもっており、また幾多のご苦勞があった様子が良く伺えた。

強いてアドバイスを追加するとすれば、現在の慣行稲作は長い経験の上で成立している伝統的な栽培法であるから、現地の人々の訓練に当たって、まず、現地稲作の栽培慣行を知り、その上に立って、何が故にどの部分を改善しなければならないかを十分検討し、そのことを噛みくだいて説明しなければならないように思う。

このことによって訓練生の理解は深まり、訓練の結果は直接農村へ持ち帰って利用される事になるのではなかろうか。突然、日本式稲作の理論を指導しても、本当の理解は得られないのではなかろうか。現地農業を知らない隊員が直接指導をするのであるから、大変な無理があるわけであるが、少なくとも最初はその栽培管理の時期々々の慣行農法を理解しながら、改善方法を

見出す努力をされる事を望みたい。

このような事により、第2作からの訓練はより充実したものになって行く事を願ってやまない。

(協力隊技術専門委員)

ハブロック地区電話局での活動報告

第1～4号報告書

職 種 電話線路

氏 名 伊達 正一

配 属 先 スリ・ランカ電信電話公社

ハブロック地区電話局

伊達隊員の略歴

生年月日 昭和33年1月1日

出身地 宮崎県

学 歴 中央電気通信学園

線路科卒

派遣期間 57年7月～(派遣中)

はじめに

とうとう、スリ・ランカにやって来た。7月28日午後3時、バンコク発コロombo行きの飛行機は、定刻を3時間近く遅れてコロombo国際空港へ。

スリ・ランカ上空に入ると、眼下は、鳥全体がうろそしたジャングルのように見える。一面の緑の間をぬって、赤茶けた川が蛇行してインド洋へ注いでいるのが見える。テレビや写真でよく見かける、熱帯のジャングル地帯の雰囲気そのものだ。

飛行機は、椰子のジャングルの上をなめるように滑空し、徐々に高度を下げていく。窓から遠くを見つめながら、この国で2年間、自分1人でちゃんとやっていけるだろうか、という不安と、この国に2年間居たのだという自分の存在を確実に残してやるぞ、という思いが交互に巡り浮かぶ。

そんなことにはおこまいなしに、時間は過ぎさり、飛行機はコロombo空港へ着陸した。

1. 生活状況と業務内容

スリ・ランカに赴任して早くも5カ月、配属先に着任以来4カ月が経過した。今回の報告書は、この4カ月の生活状況及び業務の進み具合、さらに職場における組織形態を中心にまとめてみようと思う。

生活環境

(1)住居

現在勤務している、コロombo市内南部エリア、ハブロック地区電話局より、北上すること約20キロ。スリ・ランカ電気通信局の訓練センターのスタッフ用バンガローを貸与され、ここで寝起きしている。

ここは、コロombo国際空港へ向かう一大幹線道路沿線に位置し、それによる朝晩の車の騒音公害は、どこかの国と全く同じ状況である。周囲に山はないけれども、一面のココナツ林。ちょっと歩いてこの林を突っ切ると、水田が遠くまで広がっている農村地帯となっている。

(2)食事

相変わらずのライスとカレーの毎日である。慣れを乗り越えて、飽きがきているところだ。カレーの辛さは苦にならなくなった。

近頃、一つ重要な発見をした。カレーを毎日食べているが、こちらの体調

が良い時には、その辛さは全く苦にならない。ところが、下痢をしていたりして体調をくずしている時には、その辛さがより一層舌に強く感じられる。これは、健康の一つのバロメーターとなるかもしれない。しかし、往々にして、健康でない時はこのカレーは食べたものではないから、あまり意味がないかも……。

当局の計らいにより、クッキングの為の道具は一式揃えてもらった。が、しかし、現在もお自炊できない状態である。ごはんは炊くことが出来るけれども、電熱器を使うのに、家に引かれている電力が不十分であるとのことだ。工事依頼しても、イエスの答は返ってくるが、いざ行動となると、どうもスムーズに行かないらしい。ここで文句を言っても、インクの無駄使いだからやめておこう。

と言うことで、現在、食事は全て外食である。もちろんローカルレストランであるが、店員と冗談を言い合って食べる食事も、まあまあである。

③交通

局までの交通機関は、バスである。片道約1時間を要する。ここには、政府、民間の2種類のバスが走っており、大型である政府のバスの方が少しばかり安い。

バスの車内にはスリが多く、入り口のタラップに足を掛けた瞬間から、回りにいる人はどろぼうと思うくらいに、にらみをきかさないといけない。この人の話によると、スリ達はグループ行動をとっているとのことだ。よほど現行犯で捕えない限り、盗んだ本人に対して詰め寄っても、すでに物は彼の手元には無いとの事である。

また、不思議なことに、スリの現場をたとえ目撃しても、その場で被害者に知らせず、スリがバスを降りてから、「さっき降りたのがスッタよ。」と、この調子で話しかけてくる。これは、同乗の一般乗客の態度である。

この5カ月間に、スリとの遭遇が4回、実質被害は、バンガローの鍵、お金70ルピー(約700円)。大金は持ち歩かないことに限る。

職場における組織形態

現在、前述した通り、コロボ南部地区の一画を占めるハブロック地区電話局に勤務している。

この局は、加入者数約8,000、クロスバ、電子交換機(フランス製)を持ち、更に無線施設も備え、スリ・ランカ国内ではかなり大きい方に入る局で

ハブロック地区電話局での活動報告

ある。無線関係を除くと、電話局は大きく3つに分かれる。交換機部門、地下ケーブル部門、架空裸線部門、更に日本で言う試験課がこの中央に位置する。局長に当たる地区担当エンジニア1人、この下に課長に当たる地域インスペクター3人、係長クラスのインスペクターが、上述の3部門に各々1人ずついる。

私は現在、地下鉛被ケーブルの保守指導ということで、地下ケーブル部門で業務を続けている。実際に保守に携わる職員は、インスペクターの下に位置するケーブルジョインターと呼ばれる接続班である。この班が現在3つあり、各班の構成は、接続、鉛工、仕事の段取り等を行なう主任クラスのテクニシャン1人、鉛工専門に行なう熟練者1人、その他数名のワーカーと呼ばれる人達、1班の合計は5~6人である。インスペクター以上の位置の人は英語をしゃべる。実質的保守者であるケーブルジョインターパーティーのテクニシャン以下は、英語はしゃべれず現地語オンリーである。

線路障害状況と保守要領

今日、1983年1月12日現在の地下ケーブル障害数が約45件、架空線障害が約55件である。

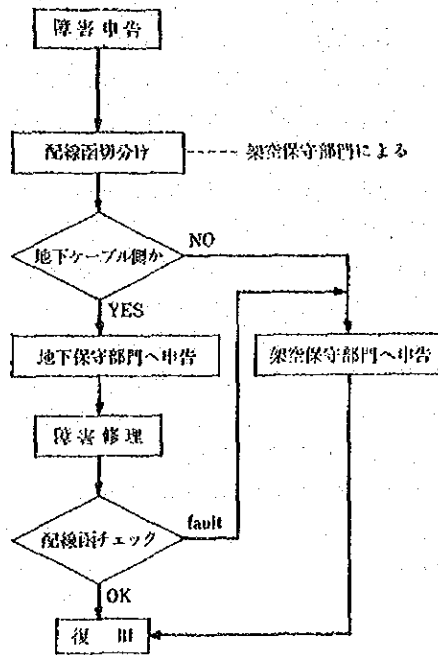
現在、スリ・ランカ西部は乾季に入っており、地下ケーブル障害数は落ち着いてきているところである。私が配属された9月、10月は雨季にあたり、障害数も200近くに昇った。日本でも何年か前そうだったように、雨後の竹の子ではないが、雨の後は障害数が極端にはねあがる。この1番の原因は、ケーブルの老朽による。最も古いケーブルで、30年近く経過しているとのことである。もちろん、保守要領にも問題はある。

障害申告から復旧まで、(次ページ)にフローで示した。障害点の最多発生は、接続点であることはよく知られているが、ここでは、電食も多くみられる。また、配線函内での心線腐食も多発している。

接続点の問題は、鉛管、半田の不足により、慢性的障害原因となっており早急な改善は難しい。また、接続点を開けて、心線切り替えして閉じるまでに、空き線を見つけるまでの時間を考慮すると、絶縁紙がかなり水分を吸いこれを乾燥させずに閉じるため、近日中に絶縁不良障害が発生している。

業務内容

現在、大きく二つに分けて行なっている。一つは、現場で行なう実地指導であり、こちらの方は主に、切り分け点をどこにするかということがまず問



題になり、どのような順番で開けて行けばよいかを、みんなで話し合うところから始まる。彼らは、無駄な鉛管解きをすることで、浪費する時間と半田とガソリンのもったいないことを、身にしみて知っている。だから、彼らと共に仕事をする時、まず念頭においておかなければならないことは、如何に無駄を少なくするかということと、現在ある物で、如何に間に合わせるかということである。これを考えておかないと、良いアイデアも机上の空論となってしまう。

別の一つは、何とかして線番収容表を作ることである。現在のこの局での保守要領は、設備の管理という考え方が導入されておらず、線番切り替えによって障害復旧を行なっても、切り替えられた障害心線はどこに行ったか全く分からなくなり、次にこの心線上部を使ったりする時、また空き線を探すのに多大な時間の浪費となる。収容表の有効性を示すことが先決であるが、この国民性から見て、かなり困難なような気がする。気長にやるしかない。

材料の要求と配給

ここハブロック地区電話加入区域は、コロンボの中でも障害の発生状況、施設の老朽度から見て、最も状況の悪い地域とみなせる。またこの地区は、政府関係者等重要加入者の居住地区に当たり、不良施設対策として、十分な物品が配給されることが必要とされる。

ところが、現在の状況は、要求物品の確保についてはかなり難しい。全ての物品が日本、英国等の外国依存のため、必要な物が常備されていない状況である。そのため、15対ケーブルで十分な所を、30対ケーブルを使ったり、架空ケーブルを地下で使ったりといったことが起こってくる。

ここでは、常備品というものはなく、取扱い局にあるのは撤去品のみである。もちろん、少対用鉛管やある程度の半田等の、使用頻度の高い材料は常備されている。ケーブル等は、必要が生じた場合に要求書を作成し、電気通信本省へ取りに行くという形を採っている。

現在、ハブロックタウンエリアからの物品要求度が、他の局に比して多過ぎるということで、上部段階でひともめあっているとのことである。物品確保のためには、この地域の重要性、障害発生、回復状況を、上部の人へ知らしめることが重要と思われる。

現地語の重要性

近頃つくづく考えるのは、現地語（シンハラ語）をしゃべることの重要性である。イギリス植民地であったスリ・ランカは、中流以上の人々、下層の人々でも努力して学校へ行った人達は、苦もなく英語をしゃべる。従ってシンハラ語をたとえ修得していなくても、この国での生活は、衣・食・住の限りにおいては、何の苦勞もないと思われる。

しかし、ここの人々と接する時、英語をしゃべれない人々はもちろん、常に英語を使っているという上流のクラスの人々に対しても、こちら側からシンハラ語で話しかけていくと、一歩も二歩もこちらの方に入ってくる。そして、彼らのレベルで物事が考えられ、話ができる。ここの人々として、自国に対して当然それなりのプライドを持っているのであり、外国人にこそ、この国に来たらこの国のやり方でやって欲しいとは、よく耳にする話である。

例えば、散髪屋さんに行ったとする。ここは暑い国だから、髪の手を短かくし清潔に保つことは、健康のために大事なことである。

ハサミとクシを持って、椅子に座っているこちらの姿が写っている目の前

の大きな鏡を見ているおやじに、この部分は短かめ、ここは切らなくていい、耳はちゃんと出るように、ひげは剃って欲しい等々、これらを全部英語で話したとしても、彼は全て理解し、間違いなくその通りにカットしてくれる。自分の国の人間ではない、外国人の髪の毛なのだから、ちょっと間違っても大変だと思って、より丁寧にやってくれる。でも、それで終わりである。

ところが、これをつたないシンハラ語で言っていると、ちょっと話が変わってくる。こちらの説明を聞き終わると、ハサミでこちらの髪を撫でながらそんなおかしな切り方はするもんじゃない、髪を短かく切り過ぎることはみっともないことだ、もっとカッコ良く切ってやるから俺にまかせろ、次から次に自分の意見を言ってくる。こちらは、スリ・ランカ人の髪型の好みを知ることができる。最後には、それじゃあ全部まかせるからうまくやってくれとなる。結果は、満足いく場合の方が少ないが、スリ・ランカカットもたまにはいいだろうと納得する。

もちろん、このような散髪屋ばかりというわけではないだろうが、シンハラ語をしっかりと覚えてよかったと思う今現在である。

2. その後の活動

赴任以来7カ月が経過、第3号報告書を書くところまで来た。今回は、ここ3カ月の生活状況、活動状況について、自分の考えを述べてみたい。

生活状況

半年以上も一つの国に暮すと、人間というもの、心底そこでの生活に慣れ切ってしまうのかもしれない。あらたまって自分の生活状況を書こうとすると、そう簡単ではない。たぶん、当初の頃不便と感じていた事も、それを続けているうちに慣れてしまっ、不便だと感じなくなったのだろう。

仕事から帰って、食べに行く現地食堂の夕食も、うまいのかまずいのか分からなくなってきている。ほとんど毎日食べに行くので、食堂の店員達はこちらが何を食べるのか心得ていて、食堂の敷居をまたぐや否や、顔を見るなり、“キャーマ、バーゲヤイノ”と、でかい声で叫ぶ。日本語に訳すると、“カレーライス、中盛り”といったところだ。こう言われると、他のものを注文する気がなくなる。以前のように、新しいものを見てやろう、食ってやろうというような気持ちだが、ここに来た当初の半分もなくなったのではないだろうか。

ハブロック地区電話局での活動報告

この暑さの中に、半年以上も暮していると無理もないと、分かってくれる人は分かってくれるだろう。それでも、食べて、寝てさえいけば病気にはならないという、誰かの言葉を信じているからこそ、今夜も食堂へと足を運ぶ。

こんな時、最高の気晴らしが、休日の海水浴だ。ちょっと日本じゃ楽しめないことの一つだ。年の始め、1、2、3、4月は気候の影響で、スリ・ランカ西海岸が海水浴のシーズンに入る。どこかの観光会社が宣伝するように、“インド洋に落ちた真珠”とまではいかないまでも、波の穏やかで椰子の葉がそよ風に揺れる、大インド洋に面する砂浜で過ごす時間は、何ものにも替え難い。

活動状況

前回の報告書に書いた通り、二つの活動方針に沿って活動してきた。一つは、これが主になるのだが、現場における実地指導である。これについては後に詳しく述べてみたい。

二つ目は、電話線の線番（MDF番号である）、配線番号、電話番号等を把握するために線番表を作成し、これを現地人スタッフに使用させることであった。

一通り、3月いっぱい線番表を作り上げ、現在、この表の見方を助言中であるが、実際にフィールドで働く修理班は、今までは、レポートされている障害線のみの情報しか与えられずに現場へ向かっていたため、現場へ向かう前に見る、このようにまとめて情報が書かれている表の見方が、甚だ不得意である。これについては、残りの任期を気長に使って、彼らの方から便利だと思えるようになるまで、見ているより方法がない。

現場における実地指導について

線番表を完成した現在、活動の中心となっているのは、ケーブル保守班と共に野外へ出たの障害修理である。

前回の報告書提出以来3カ月が経過し、この時点で活動のやり方を少し変えなければならぬような気がしている。

それというのは、これまで現地での電話線保守に対する考え方と、日本のそれが、あまりにもかけ離れているために、日本でのやり方をそのまま持ち込もうとしたことに、スムーズに事が運ばなかった原因があるようだ。一通り保守のやり方が確立されている組織の中に、日本の保守形態をそのまま移行することが、いかに困難なことであるか。最初の半年くらいで、目につく

悪い所をかたっぱしから改善して行こうというのが、土台無理な話であって7カ月目にしてようやくそれが分かった。

まず、日本のやり方は横に置いておいて、彼らのやり方でやって見ることが大切だ。よく考えてみると、日本の社会であろうが、スリ・ランカ社会であろうが、同じことなのである。そこにある組織の中に入って、本当にそこにある状況を掴んでこそ、最も必要とされる改良点が見えてくる。これが把握できるようになるとしめたものだ。何故なら、現地人スタッフもそれについて悩んでおり、改善したいという気持ちを持っている場合が多いからだ。しかし、昔ながらの方法がちゃんと存在しているので、他の方法を見つけ出すということは、彼等にとってそう簡単なことではないようだ。

これまでの任期中で、活動がスムーズに行かなかったのは、あまり日本の技術のことを念頭に置きすぎたことに原因があったようだ。時々、他の隊員からも同様な話を聞くことがあるが、このような意識が強く働き過ぎているからではないだろうか。

半年も現地人のやり方を見てみると、否応なしに技術上の問題点が見えてくる。そして、これらについての指導は、そう難しくない。廻り道かもしれないが、これが最短距離ではないだろうか。



現場での作業風景

3. 赴任後1年を迎えて

赴任してやがて1年の報告書である。今回は、業務活動の状況として、赴任して1年を迎えるハブロック地区電話局における、地下ケーブル部門を中心とした電話に関する問題点について述べてみたいと思う。

電話の障害状況

この国の電話ネットワークのシステム上、局外電話線路の障害は、障害の位置により二つのセクションに分けられる。すなわち、鉛被ケーブルで張り巡らされている地下区間、他の一つは、裸線の張られている架空区間である。当電話局は、現在、加入数約1,100加入あり、1日当たりの障害件数は、地下区間約100件、架空区間150件くらいとなっている。

現在、コロポ地区は雨季に当たり、鉛被ケーブル障害は深刻な状況である。上述の数字は、この時期の通常の教値であり、200対以上のケーブル浸水があった場合などは、一時期に、一挙200加入以上の障害件数となる。もちろん、このような多対ケーブルが浸水またはケーブル切断等により不通になると、緊急に原因箇所を探索し、復旧の措置を取る。

障害の原因

架空裸線は、人為的な切断、立木等による接触等がほとんどである。ここでは、地下ケーブルについて述べることにする。

障害の原因は、大きく二つに分けられる。一つは、人為的障害、他は、それ以外の障害である。スリ・ランカの場合、日本と比べて人為的障害が特徴的である。

(1)人為的障害の発生について

端的に言うと、障害件数に対する修理班と試験台の不足、正確に言うならば、修理班の機動性の貧弱さによっている。

現在、1,100の電話加入に対して、地下障害修理班3班、地下ケーブル部門の試験台は、簡易試験台が1台である。これらの状況のために、障害修理班は、一つの障害を直すために、できるだけ短時間で仕上げようとする。そして、次の障害修理へ移ろうとする。道具を積んだリヤカーを、ある地点から次の地点まで、町の中を押して行くのである。甚だ時間がかかる。その上他の問題がある。

問題というのは、障害修理班の直属上司の、障害修理に対する考え方であ

る。というのは、現場管理者の考え方は、一つの障害修理をできる限り短時間のうちにやり終え、1日にいくつの障害を直せるか、ということのみに頭が働いているということである。従って修理班は、その方針で仕事を行なうために、ケーブル、鉛管、その他の施設に対する扱いが大変雑になり、将来別の障害が発生しないようにということは、ほとんど考慮しない。

例えば、マンション内のケーブルの位置関係、再用鉛管の荒っぽい扱い、鉛工時におけるケーブル鉛被、鉛管の過度の加熱、絶縁紙・接続点等の湿気の未除去、etc……。時間をかけて扱えば、将来における別障害の発生が防げるのであるが、上司の方針が、その場限りの修理方針であるために、障害数は増えこそすれ、減ることはない。

(2) その他の原因

これは、慢性的な資材不足からくる原因である。ケーブルの不足は、特に重要な問題である。ケーブルの不足のために、空き線のある区間は、全て使いきってしまおうという考え方であり、空き線がなくなって初めて、障害がどこにあるのか切り分けして行く方式のため、障害点をできるだけ短い区間に追い込もうとするから、全く関係のない鉛管を開けてみたりして、障害の原因を作っているような作業も少なくない。

また、接続点鉛管は、最低7～8回は使用し、どうしても閉じることができなくなった場合に交換する。鉛管の不足により、ケーブル径の大きいケーブルの鉛被を、鉛管として使うことも多々ある。

活動内容

現在、障害修理班に加わり、野外で活動中であるが、助言中であるのは上述についての対策である。しかし、ここに大きな困難がある。というのは、前述の問題を直して行くことは、現場管理者の考え方と真っ向から対立することになり、難しい立場になるということである。この上司を説得することが、最良の方策であるが、どうも不可能のようだ。従って現在は、修理班に参加し、消極的な立場を取るしか策がない。唯、せめてもの救いは、係長クラスの自分のカウンターパートが、よく理解してくれることである。

伊達隊員の報告書を読んで

坂下 隆義

報告書を読み始めるとすぐ、今から24年前に私がコロソプラン専門家として、カンボディアに赴任した当時のことを思い出しました。着陸態勢に入って、ジャングルの上をなめるように飛ぶ飛行機から、窓外の景色を眺めながら思ったことは、私も伊達隊員と同じでした。

見知らぬ国で初めて会う、顔付き、肌の色、喋る言葉の異なった人々と一緒に新しい仕事をすると、誰しも思うことは同じなのでしょう。特に電気通信の場合は、通信のネットワークが全国的に拡がっている上に、一部の機能がダウンすると全体に影響を及ぼすことになりかねないので、余計に神経質になるのかもしれませんが。

短期の滞在ではいざ知らず、長期滞在となると生活環境を整えることが大切です。生活様式から食習慣に到るまで、状況が大きく変わるので、これらに慣れて毎日の生活が気にならなくなれば、その分仕事に集中出来るわけです。伊達隊員も最初の5ヵ月間に、日常生活の違いを積極的に消化した様子を読み取れました。さらにこの間、任国の職場とそこでの業務内容について把握すると同時に、担当する仕事の問題点を的確に指摘しています。青年海外協力隊員として、順調なスタートを切ったと言えましょう。

伊達隊員の主な任務は、地下に敷設してあるケーブル保守の指導です。彼の場合のケーブルは、細い銅線に紙を巻き付けて絶縁し、それを数10本から数100本に束ね、その上を鉛の筒で包んだ紙絶縁形の鉛被ケーブルです。この種のケーブルは、古くから使われてきた典型的なものです。ポリエチレンのような合成樹脂の発達した今日では、殆ど使われなくなって来ました。因に日本では、既設のものを除き全てプラスチック絶縁計の、プラスチック被覆のケーブルが使用されています。

その主な理由は、古い形のケーブルでは鉛の外被に亀裂が入ったり、ピンホールが出来ると、そこから水分が侵入して絶縁紙に吸い取られ、銅線間の絶縁を劣化させてしまうからです。プラスチック絶縁では、仮りに水分が侵入しても簡単には絶縁不良とはなりません。したがって、伊達隊員の任務

である地下鉛被ケーブルの保守指導のポイントは、大きく分けて次の三つに絞られます。

(1)障害点の位置測定と発見

(2)障害箇所の修理

(3)障害再発の防止

ケーブルは、電話局から電話機の設置してある場所まで連続して延びていますが、実際には数10mから数100m間隔で接続されています。この接続点では中の銅線をつなぎ、1本1本絶縁した上で外側に太めの鉛の管を被せ、その両端をケーブルの鉛被に半田で付けて、水が侵入しないようにしているわけです。

さて、障害点の探索には、切分けと言って故障回線の接続を途中で外し、どちら側に障害点があるかを調べて位置を追い込みます。このためには、半田付けを融かして接続点を開く必要が生じます。ケーブルが古くなって障害が多発するようになると、同じ接続点を何回も開いたり封じたりすることになります。当然その部分は熱のため劣化し、障害の原因になるという悪循環を繰り返します。

伊達隊員の努力は、切分け点を出れるだけ少なくし、時間と材料の無駄を省くことに注がれたわけですが、これは非常に重要なことです。将来、故障の原因となることは極力避けるのが、保守の基本原則だからです。

材料の不足も指摘しています。これは、開発途上国にありがちなことです。電気通信で使われる装置やケーブルは種類が多く、それら全てに、保守用のスペアパーツを準備しておくことは大変です。日本のように国産品を使っている所は、随時購入出来ますが、殆ど全てを輸入している開発途上国では、簡単には入手出来ません。伊達隊員も、日本では味わったことのない材料不足や、材料の再利用で苦勞をしているわけです。

厳しい諸条件の中での技術協力に最も大切なことは、普段一緒に仕事をす
るパートナーとの和です。仕事の習慣や仕きたりは、一朝一夕には改まりません。時間をかけて、相手の理解を得るしかありません。また逆に、一見不合理的に思えても、実は現地の実情に合ったやり方であることも多いので、注意しなければなりません。パートナーとの和には、意志の疎通が大切ですが、伊達隊員は勉強して行ったシンハラ語を役立たせているので、大変心強いことでしょう。

開発途上国での技術協力は、草花を栽培するのではなく、樹木を育てるようなものでしょう。1年や2年で大きな成果が上がることは稀で、何年もかける必要があります。伊達隊員の努力は、技術協力の木が大きく育つ1段階として十分役立っています。自信を持って頑張って下さい。

(協力隊技術専門委員)



スリ・ランカ人の結婚式

あ　と　が　き

青年海外協力隊員の報告書集を昭和54年度に発刊して以来、今年で5年目を迎えました。これまで、24カ国の報告書集を刊行し、多くの帰国隊員の皆様方から、現地の体験に基づく、貴重な生の声を寄せていただきました。一昨年度からの試みとして、今回のスリ・ランカ編におきましても、冒頭に現地事情を説明する報告書を置き、以下に、業務報告書を配置して、当国理解の助けとなるよう編集しました。今回、スリ・ランカ編においては、帰国隊員が少ないため、一部、現在活動中の隊員の皆様に、執筆をお願いしました。報告書集も、数をおうごとに、内容も充実さを増してきており、各界の、多くの皆様方の、協力隊を知る上での貴重な参考資料となってきております。

今後共、ご活用下さる皆様方からの、忌憚のないご意見、ご提言をいただき、一層の充実をはかりたいと思っています。

末筆ながら、この報告書集のために、ご多忙中にもかかわらず、積極的にご協力をいただき、報告書に対する適切なコメントをご執筆下さった、技術専門委員の先生方ならびに、報告書の収録を快諾され、追記の原稿を寄せられた、帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

なお、本報告集のご活用にあたり、他への転載等を企画される場合は、青年海外協力隊事務局（啓発課）に、必ず、ご相談下さるよう、お願い申し上げます。

昭和59年3月

青年海外協力隊事務局 啓発課

昭和59年3月

青年海外協力隊事務局 啓発課

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録<スリ・ランカ編>

昭和59年3月発行

編者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電話 (03) 400-7261(代)

印刷所 邦美印刷株式会社

〔非売品〕

